千島アイヌ

國の爲め北海の孤島に苦心經營
なし給へる
郡司成忠君
同　令　夫　人
に謹で本書を捧呈す
著　者

389.11
To554t

225485

日本橋豐英舍印行

女男又イア島千るせなを俗風の有固

全　正面

千島アイヌ男子
イヲンヌ

千島アイヌ男子
ムシラゲ　ーリゴリグ

全　正面

千島アイヌ男子
酋長ヤコフ

千島アイヌの男
千島固有の風俗を示す

千島アイヌの婦女
（散髮の方は千島固有の風俗として頭を卷ける方はアリユートの風俗をなせるものなり）

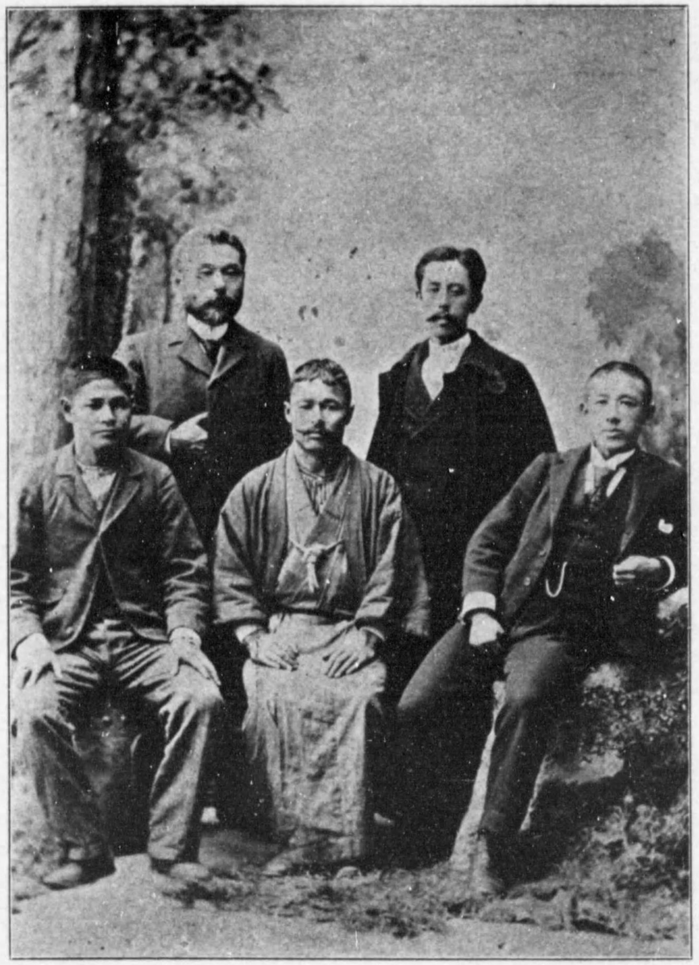
千島アイヌの婦女

全　側面

千島アイヌの婦女正面
イセッタスナ

東京帝國大學理科大學人類學教室所藏寫眞（著者撮影）

東京ヨリ始めて來りたる千島アイヌ（明治三十二年二月二十日撮影）



坪井博士　小金井博士
著者　居鳥　アウエリヤン　イヒミー

389.11 To554t

序

千島土人の精細なる調査は啻に千島土人の何者たるかを知るに於てのみならず、北海道本島に棲息するアイヌとの關係、中央主要の石器時代人民との關係を明かにするに於ても、又アジヤ、アメリカ兩大陸北部住民分布の由來を考へ究めるに於ても必要な事業で有ります。然るに千島土人は今や減少衰滅の傾向を示して居る。此時を逸しては調査は行ひ難く成るに相違有りません。千島土人は現に移されて千島の南端に居りますが其先住地は北部諸島で有りますから、彼等に關する古今の事實を探ら

んとする者は是等の地に赴いて實査を遂げなければ成りません。人類學教室助手鳥居龍藏君は此種の探檢に適した人。我が教室が此人をして此時に際し此地に臨んで調査を爲さしめるを得たのは斯學の爲誠に幸な事。私は公の關係に於ても私の交際に於ても鳥居君の成功を祝し、研究結果の摘要たる本書の成つたのを深く喜ぶ者で有ります。

明治三十六年五月

東京帝國大學理科大學人類學教室に於て
理學博士　坪井正五郎

序

世界人種多しと雖ともアイノ人の如く學者の注意を惹きたる者は稀なるべし、世界人種多しと雖もアイノ人の如く其人種系統上の說多岐なる者も亦稀なるべし、內外の人類學者が此人種に關する疑問の諸項を解說せんと務むるや宜なり、而して從來學者の研究に接したる者は概ね蝦夷島アイノ及薩哈連アイノに限り其の北千島アイノに及べる者少く足其舊居住地たる北千島の地を蹈みて精密なる研究を遂げたる者に至りては殆んど之れなきが如し、蓋北千島諸島は其地僻遠にして交通甚便ならずと雖も本邦の版圖に入りてより既に三十年に近し

北千島アイノ研究の事は本邦學者の外人に先んじて之に當るべき義務ある者にあらずや、然るに諸家未た曾て此に出でず是れ學者の深く遺憾とする所なり、余や曾てアイノ人に就きて少しく研究する所あり故を以て此恨を抱くを特に深し、今人類學者鳥居龍藏氏大學の命を帶びて北千島に航し親しく諸般の調査を遂げ其の得たる所の成績を編みて一書となし之を世に公にせらる、鳥居氏は誠に本邦學者の義務を盡したる者と謂ふべし、余其擧を聞きて喜に堪へず爲めに一言を卷首に顯す、

明治三十六年五月十五日

醫學博士　小金井良精

序

「アイヌ人ハ其住地ノ如ク世界人種中ノ孤島ト見做スヘシ」トハ小金井博士カアイヌ研究ノ著書ニ於テ記サレタル所ナリ而テ千島土人ニ至テハ他ノ民種ト隔離スルヿ更ニ甚ク從テ風俗習慣等ノ諸項ニ於テ特異ナル者多カルヘキハ豫想サルヽ所ナレトモ今日マテ世ニ其詳細ヲ傳フル者少キハ學問上一大恨

事ニ非ラスヤ況ヤ此人種ハ年々減少シ遠カラスシテ將ニ其跡ヲ絶ントスルノ傾アルニ於テオヤ鳥居君ノ新著述ノ如キ實ニ從來ノ缺ヲ補ヒ後日ノ研究ニ資スルニ足ル者ト謂ベシ一言喜ヲ記シテ本書ノ發行ヲ祝ス

明治三十六年四月二十日

醫學博士　大澤岳太郎

自序

千島アイヌ！　千島アイヌ！

汝は古來波風荒き千島列島に、水草を追ひて、移住往來し、北はよくカムチャダールを壓し、南はよくヤングルを恐れしめたり、嗚呼何ぞ其剽悍勇猛なる、されど適者生存、優勝劣敗の原則は、汝の手より幸福を奪ひ去り、今や昔日の勇氣已に消滅し、其人口の如き、又減じ減じて、憐れにも僅かに六十有餘名を殘すのみ、この形勢を以て進み行かば、汝の運命將に知るべきのみ

この運命を知る者、何ぞ一滴の涙なき能はざらんや、其汝に向ての同情は遂に余をして、本書を世に公にせしむるに至れり

余はこの書に因て、不肖なりと云へども、汝の體質、言語、神話、口碑、昔話、風俗、習慣、古物、遺跡等を記載し、以て汝の何物たる、汝の祖先の偉大なりしことを永く世に傳へんとす、聊か思ふことを記して序とす、

著者　鳥居龍藏

すゞらんの花にやどるか島人の
かほりとゞめて露と消え行く。

鳥居きみ子

緒言

本書は余が去る明治三十二年、東京帝國大學の命を奉じ、北千島に渡航し、人類學的調査をなしたる、其結果論文とも云ふべきものなり。

この書を別て二冊とせり、本篇には主として目錄の中にあるが如き事項を記し、他日出版せんとする次篇には左の項目に就て記する所あらんとす、この二冊にて本書は全く完結するものとす

(一)千島アイヌの神話、口碑
(二)千島アイヌの宗教、妄信、昔話
(三)千島アイヌの衣食住、其他の土俗
(四)千島アイヌの殘せし古物、遺跡
竪穴、貝塚、土石器包含層、石器、土器、骨器
(五)千島アイヌの殘せし石器時代の遺物と南千島及び北海道の石器時代遺物と

の關係
(六)コロボックル説に就て
(七)千島アイヌの體質
頭部、顔面部、其他體部の測定、身體諸部分に於ける人類學的觀察記載
(八)結論
(九)千島巡回日記

本書は單に千島アイヌの事のみを記するものなりと雖も、尙ほ人類學上參考、比較として、其附近に接息せる、蝦夷アイヌ、唐太アイヌ、カムチヤダール、アリュトー、コリヤーク、チユクチ、ギリヤーク、ツングース等にも説き及ぼしたり、

千島アイヌは年々歳々其人口大に減少なしつゝあるを以て、或は悲しむ可きことながら本書が彼等に向ての最後の出版物なるやも知るべからず、余は本書がこの位置に立たざらんことを祈るものなり、

千島アイヌは其言語に、風俗に大に見るべき所あり、殊に彼等が石器時代の人民たるは吾人の最も注目すべきことなりとす、千島アイヌ其物を研究せんと欲する者は固より、單に本邦石器時代人民の研究に從事する者と雖も、亦この千島アイヌに注目すべき義務あるものと信ず

ヤコフ、グリゴリー、ゲラシム、アウエリヤン、ニキハル、イヒミ、セチホンド等の千島アイヌは、余の調査に就て一方ならざる助力をなしくれたり、本書のなる全く是等諸君の賜なりと云はざる可からず、殊にグリゴリーは余の助手として久しくともに旅行往來せしを以て、同人に得たる所頗る多し、玆に其厚意を深謝す

千島旅行中は宿舍其他の事に就て郡司成忠氏及び同令夫人 奥村圓心 氏の周旋盡力を蒙りたる多し、航海中は武藏艦員諸君に負ふ所頗る多く、本書起稿に就ては我恩師坪井博士、小金井博士の教示を受けたる敢て少なしとせず、植物のことは松村理學博士に質ま、本書の表紙意匠畫は(千島アイヌの土俗品より)友人長原止水君

の手になり口繪の圖畫、文中の畫又佐藤孤羊君の手になれり、余は謹て諸氏に其深謝の意を表す本書言語篇中の蝦夷アイヌ語は神保理學博士、金澤文學博士がともに東洋學藝雜誌に登載せられたるアイヌ語學一斑より二氏の許可を得て轉載せしものとす、余は二氏が其論文を自由に引用せしめられたることを謝す

本書中の文章、寫眞、圖畫は悉くオリジナルにして他より引用せしものなし、されど千島アイヌ以外のものは何れも正しき最も信ず可き書畫より引用せり

我恩師として深く尊敬する坪井、小金井、大澤の三先生が、本書の爲めに殊に序文を送られ給ひたるは、余の最も名譽とする所にして、價値なき本書これが爲めに一段の光彩を放つに至れり、こゝに一言す、

本書中誤謬遺漏の箇所定めて多からん、後日千島アイヌの事を云ふもの、これが訂正の勞を取り給はらんことを望む

明治三十六年五月

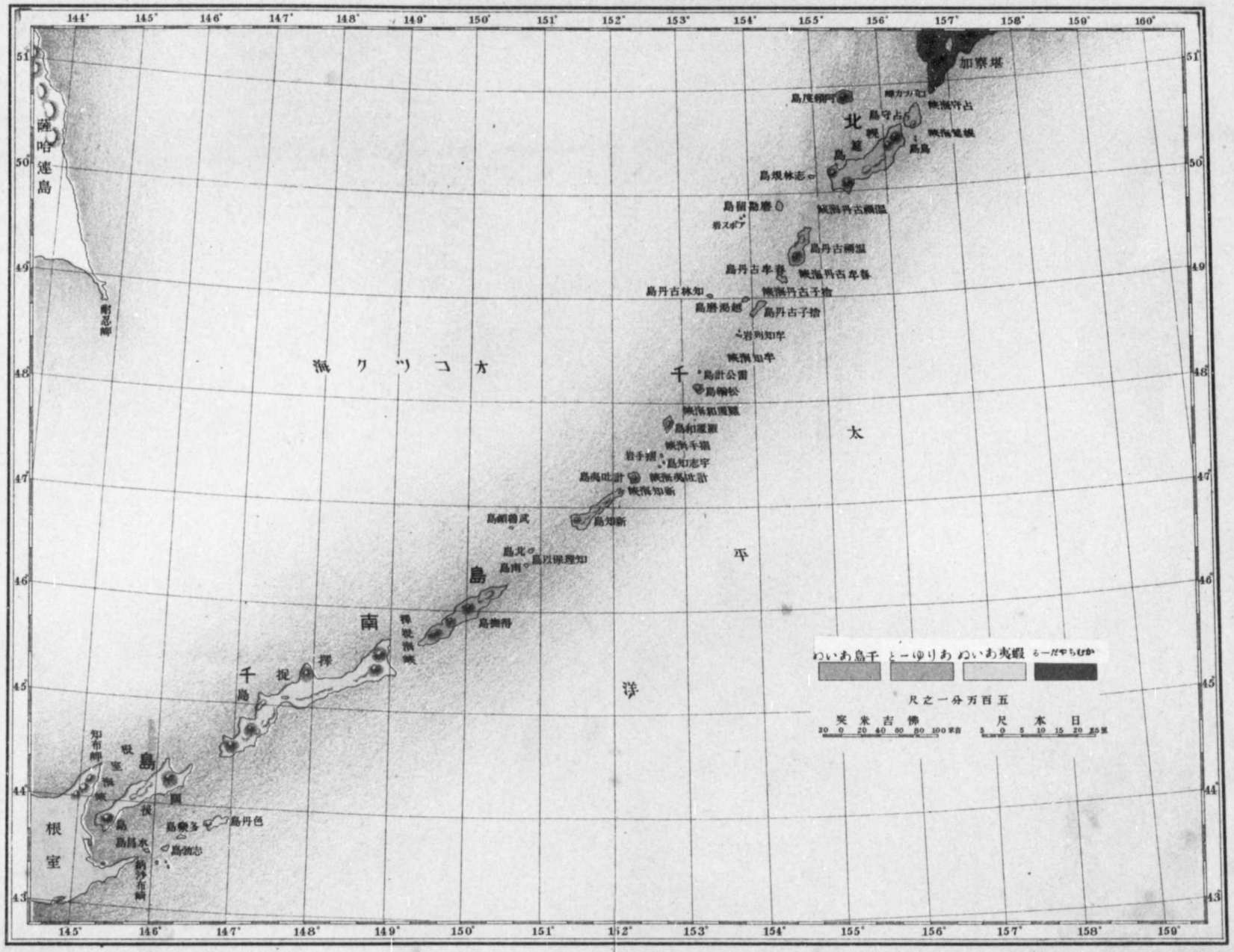
著者識

目錄

		頁
總論	千島アイヌ	一
第一章	千島アイヌに就ての參考書	一二
第二章	千島地名解	三四
	地志	三四
	千島全部の名稱	三五
	千島アイヌの名稱	三八
	千島各島の名稱	三九
	島名稱	四一
	島內地名解	四四
	東察加半島ロバーツトカ岬クリルカ湖邊の地名	六〇
第三章	東察加半島及び其島嶼の土室及び高小舍	六五
第四章	千島アイヌの移轉及び人口	七〇
	住居塲と漁塲	七〇

色丹移住以前の狀態及び人口……九〇頁
露米商社設立當時の人口……八七
第五章　人名……一〇七
第六章　千島アイヌの言語……一一四
文法……一一四
單語集……一二八
千島地名普通單語集……一五六
第七章　千島アイヌの土俗(序論)……一七三
第八章　北千島に存在する石器時代の遺跡遺物は抑も何種族の手になりしか……一七七
第九章　北千島以外に內耳土器の種類は存在する乎……二〇一
第十章　オンキロン人種……二〇八

明治十七年以前千島附近ニ於ケル各種族分布圖



千島アイヌ

東京帝國大學理科大學助手　鳥居龍藏著

總論

余の千島巡廻に赴きたるは明治三十二年五月なり、恰も帝國軍艦が毎年一回警備艦として密獵船其他の取調の爲めに千島全島を巡廻することと定まれるを以て、同年も例の如く武藏艦が千島を巡回することと爲りたり、

余の巡廻各島

余は東京帝國大學より海軍省に願ひ之に便乘することと爲りたり、

武藏艦は函館を發して根室に寄り、根室より色丹に着けり、當年千島土人は悉く色丹に移住せしめ居るを以て、余は取調の便を得る爲めグリゴリーと云へる、能く物事を辨へ居る當年五十有餘歳の老人を傭ひ入れたり、是より武藏艦は色丹島を發し、國後島を經て、擇捉島の中なるルベッに着せるを以て余は上陸してトシモイ附近の地を探檢し、再び武藏に乘りてボロモジリ島に行き、又此處に上陸して取調を爲し、次に艦は占守島の片岡灣(即ちモヨロップ)に碇泊せり、占守島は郡司大尉の居る所なり、余は直ちに上陸して占守島の各所を調査し、一週間の後此處を發して、オホートスクを經てウルップ島に着せり、是より武藏は巡廻して再び擇捉島のルベッに到り、次で色丹島に着せり、色丹島は當

著者撮影
人類學教室所藏寫眞

武藏艦千島航行中千島アイヌ舞踊をなし居る所

時千島土人の居住所なるを以て調査するの必要より軍艦と別れて此處に滯留することゝせり、即ち二十七八日色丹に滯在したる間に、余は土人の體格、風俗、其他口碑、宗教等の調査より、寫眞撮影の事に從事せり、二十七八日後根室より船の來るに會し、之に乘りて再び擇捉島のモヨロップに着し、遂に根室に歸り、直ちに根室を出帆して函館に到着し、陸奥の地を踏んで東京に歸着せり、

北海道及び樺太にアイヌの居ることは能く人の言ふことなれども、千島の土人に至りては深く之に注意したる者少し、假令多少之に注意したる者あるも、唯之を惰懶の民とし若くは無智の者として之を看過し、人類學上より之を研究したる人極めて少なし、是故に從來千島の事情は總て五里霧中に在り、殊に人類學上に於ては全く暗黑の裏に在りたりと謂ふも

天明寛政の千島諸島

アリユート種族

可なるべし、

天明、寛政の頃、近藤重藏、最上德内等の諸氏始めて擇捉、國後及びウルップを探檢せり、彼の近藤氏が露西亞の標木を仆したるは擇捉島なり、此時に方りウルップ、擇捉、探檢の必要を感じ續々此等の地に赴きたる者あり、露西亞人も亦カムチヤッカを經て占守、ポロモジリに來り南下せり、日本人は北海道を經て國後、擇捉、ウルップを探査せんとしたるを以て、其衝突點は常にウルップ邊に在りたり、

アイヌが往時日本内地に雜居したることは歷史上爭ふべからざる事實なり、現今其の血統の尙ほ内地人間に存するは推知するを得べしと雖ども、全くアイヌと同一なる人種の既に内地に雜居せざることは明らかなり、唯北海道には今も猶ほアイヌの存在を認む、而も此アイヌは尙ほ南千島の國後、擇捉兩島にまでも同一なる種族のもの住居す、故に國後、擇捉及び北海道の土人を蝦夷アイヌと云ひ、樺太に居るものを樺太アイヌと云ふ、然るに尙ほ千島のウルップ以北カムヤッッカ半島以南、占守よりラサワ島までの間に居る土人は千島固有の土人にして即ち千島アイヌと稱する者是なり、從來この土人は多く人の知らざる所ものにして、古來日本人の千島土人と視たるものは多くは蝦夷人、即ち擇捉、國後のアイヌにして、今日色丹島に殘存する所の眞の千島土人の謂ひにあらざるなり、

尙ほ一の注意すべきことあり、ウルップ及び新知には舊と千島固有の土人に非ざる者にしてアリシアン諸島中より移したるもの住みたり、この種族は即ちアリユート是なり（又片岡灣にもアリユート土

余の取調項目

人の家四五軒ありたり）然るに千島交換の後此土人は他に移りたるを以て、今はウルップ、シンシルは無人の島と爲りにき、

余の今回の調査は主として北千島に住する千島固有の土人に就てなしたり、されば余は彼等に就て出來得る限り躰質、言語、風俗、習慣、古傳、口碑等の取調をなしき、

移住當時の人口

現今色丹島に居る所の土人は、明治十七年日本政府が北島より移住せしめたるものにして、其當時九十七人ありたりと云ふと雖も、余の調査したる所に據れば少しく疑なきこと能はず、而して現今此島に居る所の者は露西亞教の感化を受くるを以て、其土人の名も露西亞風の名を附し、尚ほ露西亞派の教會を設立せり、此教會の調査に據るに明治十七年に移りたる土人は九十四人と爲れり、然るに色丹戸長役場の帳簿にて余の調査したる所にては九十六人とあり、其中一名は赤子にして移住當時直ちに死せしものなる故に大略明治十七年には九十五六人在りたるものと見て可ならん、此人員は今日に至りては、僅に十六年明治三十三年までを經過せしのみにて其死亡者六十三人に達し、其出産者は僅に四十四人にして、而も其中十八人は生後直ちに死亡せり、故に現在の人員は總數六十二人にして而も男子より女子の方十二人多しとす

	生		死	
	男	女	男	女
明治一七年	—	—	—	—
仝 一八年	一	一	一	四
仝 一九年	一	—	—	一
仝 二〇年	二	一	一	七
仝 二一年	二	三	三	六
仝 二二年	一	—	一	—
仝 二三年	—	—	一	一
仝 二四年	—	—	—	一
仝 二五年	—	—	二	—
仝 二六年	—	—	二	二
仝 二七年	二	一	一	三
仝 二八年	一	—	—	二
仝 二九年	二	—	—	—
仝 三〇年	三	二	二	一

人口增減

總論

仝	三一年				
仝	三二年				

露西亞化

過去に於ては勇壯剽悍の土民として北はカムチヤダール種族を畏れしめ、南は擇捉、國後の蝦夷アイヌを驚かしたるクリールスキーアイヌの現狀は僅に六十二人の命脈を保てるに過ぎざるなり、此勢を以てすれば、遠からざる中其絶滅を見るやも知るべからず、左れば人類學者は今に於て其研究を爲すの必要あるべし、

抑〻露西亞は西比利亞各地より次第に進んでカムチヤッカを征服し、以て自己の管轄と爲し勢に乘じて尙ほ南進し、遂に千島の土人も露國の管下に立つに至らしめたり、之が爲めに彼等の固有の宗教、風俗、習慣は悉くスラボニック的に變化し、其國粹としたる所のものは全く其迹を絶つに至れり、而も彼等は皆胸に十字架を懸け、總て希臘教を奉信す、

此の如き有樣なれば今日彼等に就て其固有の風俗習慣を調査すること頗る困難にして、余は滯在二十八日間に於て彼の衣食住より、冠婚、葬祭の模樣を探査するに非常に勞を爲したり、

千島土人は現今は悉く色丹島に住居すれ共、始め彼等の住みたる場所は何處なるやといふに、明治十七年以前に於て開拓使の注目したるはシャシコタン、オンヲコタン、占守の三島なりしが如し、然れど

色丹移住以前の居住地

市助

アムール河畔

も是れ大なる相違にて、實は彼等の住居地は占守、ポロモジリ、及びラサワの三島なりき、而してオチコタン、シャシコタン其他の諸島は皆彼等の漁場にして、彼等は水草を逐ふて移住するの民なるを以て、其生活の必要上より住居を轉じつゝありしなり、而して明治十七年以前に於て千島土人生活の中心は占守のペットポーにてありたれども、古代にありてはポロモジリ島のペットポなりき、其は彼等のポロモジリの口碑中「鳥の群より人の群多し」と云ふことを傳へり、以て其當時の繁昌を爲したることを察すべし、然るに近來露國のカムチヤッカに手を出してより、ペートルボルスクの同半島に設けられしを以て其交通の便利よきことより遂にシムシュは千島群島の中心と爲るに至れり

此他大切なることはラサワと云へる島にて、寛政天明頃の記錄に見へたる如く、露西亞人も此島を中心として日本の沿岸を探偵し、我國に歸化したる市助なる者亦此附近の者なり、即ちラサワは南千島と北千島との中間に在りて、天明、寛政の頃は政治上にも關係ありたる所なり、

カムチヤッカは露西亞が之に手を下さゞる前は極めて無意味の地たるに過ぎざりき、彼のアムール河畔の如きは其位地宜しきに因りて、土人は進歩の度を早めたるものなれども、カムチヤッカに至ては其地勢上、甚だ遠遐なりしを以て露西亞の干渉を俟ちて始めて生面を開きたるものなり、然るに北千島に在りてはカムチヤッカの狀態以上の如しと雖も、其以前より古く蝦夷アイヌと交通したる爲め相當の生活を爲したり、既にコサック兵の來つて千島の極北の島嶼を占領したる時も、其土人は我邦の

木綿、刀劍等を所持せりと云ふ、尙は千島土人の談話に依れば擇捉、國後の蝦夷アイヌは日本の貨物をラサワ島まで持來り、此島にて千島土人の物品と互に交換せり、而して當時の交換物品は蝦夷アイヌは我邦の木綿、鐵鍋類を持行き、千島の土人は臘虎の皮、大鷲の羽を持來り互に之を交換せり、と云ふ、（又土人の口碑に據れば、カムチヤツカの土人は常にクリール海峽を經て占守島に來り、千島アイヌの墓を發いて鐵器類を持去りしこと屢々ありたりと云ふ）余は今回ポロモジリ島を探檢するに當り、彼等の傳ふる所の我邦の鐵鍋、鍔等を發見することを得たり、

さて以上の千島土人はこれまで世人、否な學者に忘れられたるものなり、不肖なる余はこの忘れられたる土人否な今やまさに絕滅せんとする六十二人の千島土人の調査として東京帝國大學より出張を命ぜられ千島に赴きたり、本書は即ち當時の取調結果を記したるものなり、

千島之事

東海得撫島より前路。新知島より東蝦加地方に至るまで。凡千餘島みな丑寅に流る。所謂千島にて。蝦夷人之を稱してチュプカと云ふ。チュプカとは。日出處といふの義なり。其島の大なるもの十六。小なるもの其數をしらず。古昔皆我蝦夷の屬島たりしに。八十年前正德年中。露西亞人。東蝦加併呑してより。漸々に諸島を蠶食して。三十年前より新知迄を服從して。其島々の名を改めて。露西亞の名となし。二十年前より夷人の風俗をかへて。露西亞の風俗となし。往古より日本に屬せし蝦夷をして。髮を組み帽子を被り。股引を用ひ靴を穿ち鐵炮玉藥を與へ。露西亞人の言をつかひ。露西亞の佛を頸に掛け。露西亞より役人。並にコウロウイシヤムといふ教法師をして。時々諸島に至り撫順せしめ。其夷人も盡く露西亞に貢を納るゝに至らしめ。十年前より得撫島に到りて土着し。傲然として去らざるに至る。東蝦加はクルセムの國地にして。本我蝦夷の種族なり。其地今露西亞北海の要津となる。嘆ずべきにあらずや。チュプカ諸島の地理。前編の圖書大抵疎漏少からず。天明中。最上常矩。嘗て得撫島に至り。露西亞人イシュヨテクタに邂逅して。其大略を得たり。然れども未だ詳なる事を得ず。寛政十二年守重奉命して。擇捉島を按察し。露西亞の建たる十字の柱杭を倒し。同島カムイヤツカチイに於て木を立て。日本の標とす。翌年擇捉島を新開し。露西亞人に變ずる所の風俗を改て。木邦の風俗となす。時にチュプカ夷人。イチヤンゲンシ來て投化す。イチヤンゲンシは。ラクヨウ島の產なり。其子インモンゲセツクルも共に。木邦の風俗を仰ぎぬ。則イチヤンゲンシを改て。市助と名く。市助曾て東蝦加地方へ往來し。能く針路を辨し。其島嶼碇泊のある所と。風順汐路の宜き所を知る。於是守重。來を紙上に聚て。島形を作らしめ。語問講究し。擇捉の酋長。イコトイ及ハツコ。其他しば〳〵チュプカ諸島へ。往來經過せる夷人は。ウシビタカロクイベツケウシ等と。再三討論して。初て諸島の形勢詳なる事を得たり。加ふるに變人の說を以てし。邪弗加考を作る。

得撫島（露西亞人改名オトセナツサトイと云）

此島今木邦と露西亞と。分界の地となれり。擇捉島カムイヤツカクイより。得撫島オカイヤタチ迄。渡海凡十六七里實に當る。周圍凡七八十里もあるべし。港泊の東邊はトホ。（深凡六尋）四邊ハヲニナウにあり。此地古來より。擇捉國後根室厚岸四郡の夷人等。露西亞人ともに。古來より臘虎獵せし所なり。然れども土着の夷などは。夏秋の間集り漁するのみにして。時として越年するものもあり。露西亞人は。日本より多く此地に越年す。三十年前。露西亞人と蝦夷人と。北島に於て爭鬪あり。それより後。新知前路の夷人。盡く露西亞の屬となる。寛政七年。露西亞人一時に六十人渡來。漸々に歸國し。其中ケチトフシ其外十七人居殘りて。今に此島に在留し女三人あり。生む所の子既に七八歲に及べり。

露西亞人　初は東邊トホに居。今は西邊ヲニナウへ移れり。

其產物は臘虎を第一とす。夷人は臘虎を捕に。弓にて射。やすにて突取。露西亞人はサシ網を張り。鐵砲にて打なり。又ニノと云（此鵰ムニとなる）貝多し。其他海豹鮭鱒ウルツプ。

近來名を與へて紅鱒と云。島の名もと此魚多きに依て名く。

あめ鱒イルカ鯨オキナの類。木は櫟檪五葉松イタヤユイニの類。山はカヒナスフリ。則擇提より見ゆ。其周圍は。西邊は。オカイウタラより。チプトチヘツまで一日路。夫よりロツチンまで一日路。それよりウツチツプまで一日路。夫よりシンムコまで一日路。合せ四日路。東邊は。オカイソテよりトホ迄一日路。それよりアタツトイまで一日路。夫よりアトイヤまで一日路。合せ三日路にして盡るなり。但得撫島按檢は。天明六年官初て。山口某最上常矩を遣し。寛政三年官又最上常矩和田某を遣し。その後松前より一度人を遣し。享和元年官又富山保高深山某を遣し。供に其地に於て。露西亞人に邂逅すと云。

ヤンケチリポイ島露西亞人改名ヤムナツサトイ

得撫島より渡海凡二十里。周圍一日路港泊なし。巖石の上へ寄り木を渡して。夷舟を揚置なり。木は一切なし。草のみ生ず。魚も少し唯エトピリカと云鳥のみ。

エトは嘴ピリカハ美の夷言にして。此鳥の嘴赤くて。うつくしきによりて名く。

夥しく群飛し。手を以て容易に捕得べき程なり。夷人此島へ渡れば。此鳥をのみ食料とし。其骨を拾て薪とす。此島にカムイツツカと云へる泉あり。岩砂の間より僅一碗ほどづゝ涌出る。色香とも全く辛き酒の如し。久しく酌置けば甘くなり。其側にて酒の噎すれば。忽に水濁れて。又別の所へ湧出。酒を釀せし桶を持ち行ても泉出ずと云。實に奇水なり。露西亞人此泉を名てキスウトタと云。

變書に云。クリルの諸島に。酒泉を出す島あり。蝦夷人來て之を汲て還るものあれども。海上を經るに至て。悉く常の水に變するなり。此酒泉の外に水一滴もなし。又カチコロと云鳥あり。大さ燕の如く。羽は白黑なり。之をとれば口より油を吐出すと。此島も古來擇提夷人。臘虎獵として渡海すと。

レブンチリポイ島レブンとは夷語の沖と云言なり

此島大さヤンケに同し臘虎住めり。

マカンルヽ島露西亞人改名ヘセウヒ

此島大さチリポイに同じ。臘虎トゞあり。木なし夷人此島へ至れば。エトピリカ鳥を捕て食料となす。其骨を燒て薪とす。此島夥しくして。内地の鮭鱒の多が如し。此島も古來より擇提夷人の臘虎獵場なり。

ラツコ島

此島は。擇提島得撫島の東洋に當れり。晴天には海上遙に見ゆ。此地本クルムセの夷人島なりしに。近來露西亞に併呑ぜられ。その風俗も變ぜり。此島に夷人多く住て。露西亞人。得撫島ツニナウより出帆して此島に渡海す。此島夷人は皆鼻へ穴を穿ち環を通ず露西亞の文字を習ひ物を書なり。其夷人名をキモヘイと云もの得撫島の露西亞人の許に來て。其本國の舟を造る。其製舟トゞの皮にて張り。袋の如くに拵へ。中には木を骨に入れ夷人一人乘りて袋の口をしめ切り。水のいらざるやうにし。櫂にて左右へ搔き走り隨へ上れば骨を去り。皮を疊みおくなり。此舟を夷人はトシトチツプと云。露西亞人はマイタレと云。國後の首長ツキノエ譬て云。クルムセの舟を見しことありしに小船を皮にて包み。巾着の口の如にして其口へ身を容れ。皮袋の口をしめ切り。底へは石などを入れ舟を重くす。いかなる大浪にても島の浮ぶが如く舟も人も波の中へくゞり入りて。又浮く事自在なり。クルムセの人此舟に乘り沖にて鳥を逐を見しが。兩手には弓矢を持ち。舟は櫂を動したり。思ふに袋の中に糸などの仕掛ありて足にて櫂を動かすならんと厚岸酋長イコトイ并イチヤンゲムシ云。クルムセの夷人はトイチセコツチヤカムイの齋なり。老夷傳へ云古へ夷地トイチセコツチヤカムイと云ものあり。其身甚短し皆穴居す。夷地開くるに從ひ漸々に奥地へ入り。遂に其種族相率ひて筏に乘り。東洋のラツコ島へ往きて其部落をなせりと。又東察加にもクルムセの種類あり。

新知島露西亞人改名セムナツサトイ

此島は得撫よりは少し小なり。レブシチリポイより。新知島モヨロへ渡海す。

此渡りの汐路は。擇提の渡よりは弱しと云。ハロンノツの汐は強し。

順風は西を吉とす順風上洋なれば。早天にチリポイを發し力を盡して舟を行り。黄昏に新知に着船すと云。三十里内外もあるべし。此島の前路みな本邦の屬夷なりしに。三十年前より露西亞に服從し。それより二十年前以來夷人悉く露西亞の風俗に變じて。男女とも髪を組み帽子を被り。股引靴を着し。佛像を掛。鐵炮を持つ。露西亞役人も時々來るなり。

寛政十年露西亞の役人。三人此地まで來り越年し。翌年歸國す。木國の頭役替。又金銀吹き直しありしことを。知らずる爲めに來ると云。（下略近藤氏邊要分界圖考）

第一章　千島アイヌに就ての參考書

これまで千島アイヌのことに就て何程まで知られ居りし乎、余はこれに付て種々參考書を求めたるが左の書類を得たり、因て余は此處に其書名を列記するとともに尙其書籍に付て聊か記するあらんとす

（一）ミルン氏 Notes on the Koro-pok-guru or Pitdwellers of Yeso and the Kurile Islands.

此論文は日本亞細亞協會報告第十一卷第二冊（一八四―一九八頁）に記せられたるものなり、氏は最初にブラキストン氏が始めて北海道の竪穴、石器、土器に注目せられたることより、次に自身が根室及び辨天島、擇捉島、其他北海道の竪穴を見、土器、石器を採集せしことに及び、扨是等の器物を製造使用し、竪穴に住ひし者は抑も何者なる乎との疑問を起したり、アイヌはこれに就て、コロボッグルの遺物なりと傳ふ、千島の北端には今尙ほ竪穴に住へる者あり、此所に於てか、氏はこの竪穴に住ひし人民は或は北海道に石器土器を遺せし、アイヌの所謂コロボッグルに非らざる乎との考へを有し、一八七八年（明治十一年）氏は千島の占守島に渡航なしたり、當時は未だ現今の如く千島は無人の土地にあらずして、同島にも土人は居住なせり、ミルン氏の占守見聞は以上の論文中、僅かに一九一頁の所一頁にのみ登載せられたれども、この事實は最も有益なる報告にして、今日千島土人のことを云ふものはこの一頁の報告を常に參考として使用するに至れり、

氏の占守に赴かれる際には、人口は男女、小兒合して僅かに二十二人に過ぎず、而して彼等は自から "Kurilsky Ainu" と呼び、固有の言語の傍、聊か露語に通ず、容貌は蝦夷アイヌと稍や異なる觀あり、鬚は濃なれども短かく、蝦夷アイヌの如き長髯のものを見ず、頭は圓く、身長は小にして、衣服は西洋形にて獸皮、鳥皮等より作り、足に海獅子の長靴を穿つ、而して彼等の住居は竪穴なり、更にミルン氏は土人の語れることを記して曰く、彼等は時々木船にてカムチャッカに行くと云ふ、二年以前、彼等の或ものは南方に移りたれとも、其の何島に至りしやを知らず、然るにスノフ氏によれば、其南方に移りし或ものは一八七九年、一八八〇年の冬間マツァに住ひ、後又轉じてラシア及びウシ、ルに來れり、要するに彼等の移轉は常なきものゝ如し、尙ほスノフ氏は云へらく彼等の或老人は云ふ土人の最初は唐太島より來れりと、

以上はミルン氏が論文中に掲げたる千島土人に關する事實なり、

この文は頗る簡單なりと雖とも、千島土人の色丹移住前の有樣を知らんとするには是非とも參考とすべきものにして、且つ其躰實の二三の記載は又大に注意すべきものとす、

（二）スノフ氏 Notes on the Kurile Islands.

一八九七年の出版なり、氏は船長の職を務め久しく千島にあり、氏は專門學者にあらずと雖も、氏ほど千島の事情に精しき人はあらざる可し、

同書は其名の如く千島に於ける一般の事を記載せし者にして、其中に含まるゝ者は歴史、動、植、人類、地質、地理、氣候等あり、何事にあれ、苟くも千島に就て云はんとする者は是非本書を一讀すべきなり、

本書中吾人の參考とすべきは第三章「千島の住民篇」「第六章諸島嶼海峽篇」の二なり、

「住民篇」記載中注目すべき點は左の如し、氏が一八七八年に千島群島に至りし際にはウルップ、ウシシル、シュムシュ、ラシャワに住民ありたり、而して尚ほシムシル、マタウ、カリモコタン、シャシコタン、ヲチコタン、パラモジリに古村落の跡あり、亦ケトイ、エカルマ、アライドには土人漁獵の足留場の跡あり、されど千島土人生活の中心は全く占守島なりき、一八八七年よりは盛に外國船の此所に漁獵をなし始めしを以て、土人の風俗の上には非常なる土俗學上の變化を來したるを述べ、其れより彼等の竪穴に住すること、風俗、言語等を記載せり、

「千島諸島嶼篇」には千島各島嶼の山川港灣等を記せしものなれども、其中に所々古村落即ち竪穴の遺跡あることを記せり、吾人はこの點に注目すべし、

スノフ氏が千島土人に就ての意見の大要を記せば左の如し、千島土人はアイヌ種族なるや明かなり、蝦夷及び擇捉のアイヌはアイヌとしては比較的固有の性質を有するものなれども、擇捉以北の千島アイヌは吾人を以て見れば彼等は純粹のものに非ずして、蓋しカムチヤッカ人、若しくは露西亞人の曾て茲に移せしアリウトの雜種にあらずやと思はるゝなり、則ち其證は少鬚、小眼、出唇、肥頰等の如

き是にして、殊に肥頰はカムチヤッカ土人に類似するが如し、尚ほ土俗上に於ても蝦夷アイヌと異なるものあり、則ち彼等の絶へて熊祭をせず、髭篦を用ひず、彫刻をなさゞる是れなりとす、而して彼等の言語は全くアイヌ語なれども、殊に唐太のアイヌ語に類似すと、著者は尚ほアイヌの口碑コロボックルの遺せし竪穴と千島土人の竪穴との比較を述べたり、

本書は色丹移住以前の土人のことを調査するには最も有益なるものにして、殊に千島土人の色丹移住前の土俗生活の狀態を知るには必ず參考に供すべきものとす、

(三)ヒチユコック氏 The Ancient Pit-dwellers of Yeso.

この論文はスミソニアン報告一八九一年、一七—四二七頁にあり、而して文中色丹土人、同居住の寫眞版六葉と他に根室の地形、北海道石器時代遺物圖（遺物の中に僞物混ぜり、例せば其土偶の如きこれなり）を挿入せり

同書四二〇頁より四二二頁までにはミルン氏亞細亞協會報告第十卷第二冊の一八八—一九〇頁に記せしものを重記したり、而して氏は北海道及び擇捉に存在せる竪穴、これより出づる土器、石器は抑も何人の手になりしものなる乎との疑問を起し、アイヌの口碑コロボックル、日本人の古史の所謂土蜘蛛の事に移り、尚ほ參考としてミルン氏の占守の竪穴、アリウトの竪穴、及び曾て羽柴氏が東京人類學會雜誌に投ぜられたる庄内竪穴類似の小舍を引用せり、

氏の文中見る可きものは四二三頁より四二五頁までにして、こゝには色丹土人の人口、戸數、土俗の大要を記し殊に家屋のことを精しく記せり、本篇の主點は全く茲にあらん、

スミソニアン報告編者はこの論文を有益なるものとして、殊に同年の報告中に納めたり、余はいまだこの論文にては滿足なし能はざれども、兎に角色丹土人の當時牢穴居の有樣を精しく說明するものはこれの他に無ければ、千島土人の竪穴のことを云はんとするものは、必らずこの書を參考引用せざる可からず、

（四）サブエージランドア氏 Alone with the Hairly Ainu.

一八九三年の出版、氏は曾て北海道を一周し且つ色丹島にも渡航し、歸國この書を公にせられたるなり、本書中千島土人に關する條は第九章「竪穴住民コロポックル」篇中の八七―九〇頁と、第十二章「千島群島、の全篇（一二一―一三一頁）と附錄三〇四―三一二頁となり、

「千島群島」篇には氏のスクッチせられたる色丹土人の男女三人の容貌風俗を圖す、而して一二一―一二四頁には主として千島群島の地形、名稱を記し、一二五―一二八頁に色丹アイヌの土俗を記し、一二九―一三二頁に擇捉、國後兩島のことを記せり、要するにこの篇見るに足る者なし、第九章「竪穴住民コロポックル」篇は大に見る可きものあり、其大要は色丹土人は全くアイヌにして其脛骨の異なる外（則ち蝦夷アイヌは脛骨偏平、色丹アイヌは圓形）二者更に異なる所なしとてミルン（亞細亞協會報告の文）バッチエラル著述中の文を駁されたるなり、

氏は容貌、躰質に於て色丹アイヌと蝦夷アイヌと同一なりと云はれたり、殊にこれまで世人が千島土人の身長を小なりと思ひしも、氏は色丹アイヌの身長六一インチより六二インチ四分の三、蝦夷アイヌ身長も又六一インチ六二インチ四分の三なれば互に同一にして、決して色丹アイヌは身長の小なるものにあらずとせり、この結果は又小金井博士の測定に等しと云ふべし、

余は氏の說に就て疑はしと思ふとあり、氏は何の證ありて色丹アイヌの脛骨を圓形となせしや、第九章の文中一も測定を示すなく、また附錄三〇四―三〇五頁の色丹土人測定の文中一も其の事實を示すなく、只だ單に「脛骨甚だ長しと」記せられたるのみ、氏は斯くの如き有益なる事實を色丹土人の中に發見せられながら何が故に其の測定結果指示數を書中に明記せざるや、余は甚だ疑ひなき能はざるなり、

氏の色丹土人の躰格調査を見るに、骨格にてなせしものにあらずして、生躰にて調査せられたるものなり、生躰にて調査せられたるものとなせば、決して外面より其脛骨の形狀を知り能ふべきものにあらず、然るに氏はこれを公然と記す、余は未だ氏の精確なる測定調査の報に接するまで氏の云はるゝ脛骨の圓形には同意する能はざるなり、

尙ほ氏は色丹土人は竪穴に住まずとなし、バッチエラル氏を駁し、又占守土人の曾て竪穴に住ひしは

是れ先住者の竪穴を利用したるものならんとてミルン氏を駁せられたるがごときは、實に余は氏の見聞の博からざるに驚かざるを得ず、占守土人の竪穴を自から作り、これに住するは只だにミルン氏の記載にのみ存する者に非して、ポロンスキー氏の千島誌、長谷部氏千島巡航雜誌、スノフ氏の千島誌、其他諸書に散見する多し、殊に現今色丹移住の千島土人は移住前これを作りたるなり、この事實は少しも疑ふべきものにあらず、氏にしてこれを疑ふこそ反て疑はしけれ、且つ現今の色色土人は竪穴に住まずと云はれたれども、是れ氏の調査の充分ならざることを世に示すものにして、色丹土人の竪穴（移住前と少しの變化はあれども）に住まふことは小金井氏、ヒチユコツク氏、其の他同島に渡航せし人は何人もこれを疑はざる所なりとす、

氏は附錄三〇五―三一二頁中に集められたる蝦夷、千島兩アイヌの單語は參考とするに足るものなれども、余は氏が兩アイヌ語を互に區別するか、或は二者に印しにても附せられざりしを遺憾とす、氏の單語集にては何れが蝦夷、何れが千島なる乎を知るに苦しむ、

されど氏の色丹アイヌを以て蝦夷アイヌと同一なりとせられたるは、吾人は氏に向て其調査の勞を謝せざる可からず、

（五）小金井氏 Beiträge zur Physischen Anthropologie der Aino. 第二篇

小金井教授は都合二回アイヌ調査として北海道へ渡航せられたり、而して第二回巡回の際には色丹島に寄航せられ、曾て千島群島より移し來りし千島土人の人類學的調査を試みられたり、其調査報告は醫科大學紀要アイヌの論文第二冊生躰調査篇に登載せらる、教授はこの論文中千島土人に就て如何なることを記せられたるか、其を左に記載せんとす、

躰質　教授の調査に最も重を置かれたるはこの部門なりとす、而して其調査は骨格に因てせられたるにあらず、專はら生體に就て測定觀察せられたるものとす、教授の調査に係る人員は男子七人、女子十三人、合計二十人なりとす、

氏は說き出して曰へらく、ミルン氏は千島アイヌを身長短小、圓頭、濃き短鬚を有し、長鬚の者なく且つ容貌も蝦夷アイヌと異なるが如く云はれ、又スクリバ氏は千島アイヌはカムチヤッカ人と露西亞人との雜種ならんと云はれたれども（二九八頁）氏が体質調査の結果は、千島アイヌは蝦夷アイヌと等しきものにして、二者特別に異なる點無きことを告ぐ（二九九頁）と記せらる、而して教授の測定は二七三頁より二九七頁の中にあり、尙ほ個人としての躰質上の記載は男子は三六三―三六六頁、女子は三九一―三九六頁にあり、更に二七三―二九七頁の測定一覽表とし、尙千島土人の容貌躰質を示す爲めに圖版第六版六、第七版四に寫眞を出したり、

教授は躰質上千島アイヌは蝦夷アイヌと全く等しきものとせらる、今教授の測定せられたるものゝ中より、一二の測定を揭げ、千島、蝦夷、唐太の三アイヌと比せば左の如し（男子）

更に身長を記せば(男子)

頭形		指示數
アイヌ		七六、七
唐太		七七、二
蝦夷		七八、三
千島		

身長		身長(ミ、メ)
アイヌ		
唐太		一五六六
蝦夷		一五六六
千島		一五七九

小金井教授は男子の中、一人ブレチンアウエリアン、女子の中一人、ツエルナヤステバニダは或は露西亞人との雜種にあらずやと疑はれたり、(三六四頁及び三九三頁)、

言語　千島のアイヌ語は蝦夷のアイヌ語と毫も異なるなし、只だ發音、其他の少しく異なるは是れ二者の久しく相接せざるに因るとて、其證として總計二十五の代名詞、名詞を比較せらる、(三〇〇頁)

口碑　教授は明治九年長谷部氏等の「千島巡航雜記」中記する口碑を基礎とし、千島アイヌは元、得撫島附近にありしが漸時に北進せしものなりと云はる、(二九九頁)

名稱　人名は現今露西亞名を用ゆれども、固有語は全くアイヌ名なり、即ちストロンアヤコフのコンガマグルの如し(二九九頁)

土俗　風俗は露化なしたりと雖ども、尙ほアイヌ固有の風は殘り居るものあり、假令は婦女の口邊及び手甲の入墨の如き是れなり、現今露人堅くこれを禁じたり、(二九九頁)

以上は小金井教授の千島アイヌに就ての研究結果なり、(色丹島の現今の家屋の記載は三〇六―三八頁にあり)

現今千島アイヌ調査の精密(躰質)なるものこの論文の外にあらざるべし、されば苟くも千島アイヌ殊に彼等の躰質を云はんとするものは、この書を座右に置かざる可からず、

(六)ラタム氏 Elements of Comparative Philology.

(七)同　Descriptive Ethnology. 第一冊

二書ともラタム氏の著なり、前者(一六八―一六九頁)後書(四九七―四九九頁)ともにタライカ、蝦夷、千島の單語を列記せり、この三種族の單語全く相類似せり、この書にはタライカ、蝦夷、千島語の傍に滿州語、カムチヤツカ語、チユクチ語、コリヤク語、ナモロ語等の比較もあれば參考とする

第一章　千島アイヌに就ての參考書

に便利なり、兩者とも出版は古けれども參考とするには可なり、

（八）バッチエラル氏 The Ainu of Japan.

バッチエラル氏の書中に直接千島アイヌのことを記する所なし、只た第二第三章「日本の有史以前」中の三一一の所、一頁に千島土人のことあり、

氏が千島土人を玆に記せしは、この章に於てコロポックルとの比較をなせしを以てなり、氏は云へらく色丹、其他千島群島に居住する土人は竪穴を作れり、且つ色丹土人の身長は蝦夷アイヌよりも短小、容貌氣質も又稍や異なり（氏はミルン氏より取りたる所多きが如し）而して蝦夷の或アイヌは彼等を以てコロポックルの殘りものとなすものありと、

要するに氏の千島土人に就て記せられたるは、以上の如き者而已、されどこの文は常にミルン氏の論文と共に千島アイヌの身長短小、蝦夷アイヌと容貌の異なれりとなす人々の屈强の引證となす所のものとなれり、サブエージランドル氏の駁したるものこの點にあり、

バッチエラル氏は同書三一一頁中に、千島土人の竪穴の内面外面の二圖を出されたり、

（九）スクリバ氏の說

スクリバ氏の色丹アイヌ說は要するに千島土人を以て（今日色丹へ移されたるもの）カムチヤダールと露西亞人との雜種よりなりしものならんとせらるゝにあり、氏はこの說を別に自から論文として世に公にしたるものにあらず、單に Mittheil. d. Deutsch. Gesellsch. f. Natur u. Völkerkunde Ostasien. 第四卷、第三六號（一八八七年會報中一八九—二九一頁）に記せしのみ、この會報の記事は氏が一八八七年に北海道及び色丹を巡回せられたることの概畧を報せられたるものとす、小金井氏はスクリバ氏の說を一說として氏の論文中（アイノ論文、第二卷二九八頁）に登載せらる、

（一〇）グリム氏 Beiträge zur Kenntniss der Koropokguru auf Yeso demerkangen über die und Shikotan-Aino.

氏の論文は東亞萬有人種獨乙協會報告第五卷、第四八號にあり、三六九頁より三七二頁までは主としてコロポックルに關する考古學上の事を記し、七七二頁の終より七三三頁までの間に「色丹アイヌの住處」なる一章を設け色丹アイヌの事を記せり、氏の文中色丹土人に就て見るべきものは其家屋の構造（圖をも附せり）の記載なり、この文はヒチユコック、小金井兩氏の家屋の文と互に比較せば大に得る所あるべし、

（一一）キリルロフ氏千島及其沿革

アレクサムドルキリルロフ氏は一八九四年、西比利亞のブラウエチエンスクにて「西比利亞黑龍江州、沿海州地理學統計字典」を編纂せらる、悉く露西亞文なり、同書は其名の如く、書中二洲の地理、人種、人口、歷史、氣候等の事を載す、而して氏は又千島の地形及び沿革をこの書に記せり、其全文を

飜譯せば左の如し、千島研究に就て幾分か參考となるならん、

「千島」の地形を記して曰く(二一九頁)

東海に碁布したるクリール群島は其形、半圓にしてカムチヤツカの南端より蝦夷の北岬に至る、延長凡一八〇哩、カムチヤツカ火山脈に連延す、小島を除きて其數二十二個より成立し、就中最も大にして著明なるものはイテルップ、クナシル、シコタンの三島となす、全島山多く、十内外の高山ありて多くは噴火山にて死火山も亦少なからず、地味は磽确にして豐饒ならず、氣候は最も荒く寒氣酷烈なり、植物は南部を除く外、最も稀にして多く灌木草苔の類なり、森林はイテウル、クナジル、ウルップにあるのみ、動物は狐、狼、水獺、獵虎等なり、島民は皮膚暗黑色にして身長高からず、其相貌は蒙古人種よりは寧ろ歐人に類似す、一八七五年に至る迄群島の一部は露國に、一部は日本國に屬せり、されど境界の書然たるにあらず、一八七五年四月二五のペテルブルグ條約にてサハレン島の南部を露に與へて千島と交換せり、

氏は更に千島の沿革を記して曰く(二一九頁至二二〇頁)

日本船はカムチヤツカの南端に漂着せり、是に於て露人は始めて千島のあるとを知れり、時に一八七〇年なりき、一一七一年露西亞人アンツヰヘル、ゴズヰルスキーの兩人はカムチヤツカにて暴動を起し、商館の番頭アツラソウなる者を殺戮したり、而して己の罪を償ふ爲めに多くのカザック兵を率ひ探檢を企て占守島に上陸し、土民と戰て大に勝利を得、島民を露國の隷屬となし、尙ほ進んでイテウルップに渡れり、島民抗する能はず、ポリシエレックに退けり、

一七一三年、ヤクートスキーの鎭臺司令官はコリツヰルスキーなる者を遣はして千島の取調をなさしむ、而して氏の事業は大に功を奏し、占守、イテウルプの人民に毛皮の貢を課したるのみならず、日本人は鑛物採集の爲め屢々來航することを知れり、一七一九年測量家ユウレヰン、ルジンなる者占守島に渡來す、一七六六年及び一七六七年に百夫長なるチエルニー、案針助手チエレジンは毛皮貢徵集の爲めに渡來し、ヲチエンジンは蝦夷島に來れりと云ふ、是よりして千島航海の端を發き、露米商社はウルップ島に支店を開設せり、其他貿易の事業の爲め露米の商人は屢々渡來せり、露人サルヰチエウは一七八九年に來り、英の航海者ブロウトンは一七九六年に、海軍大尉フヲストーウダウイゴ(露人)は一八〇二年に來り、船長クルゼンシテルンは一八〇五年に、船長ゴロウヰンは一八一一年に來りき、ゴロウヰンは遂に日本人の爲めに國後に擒となれり、

北部千島の漸々露領に歸すると同時に、耶蘇敎も傳播し、一七四七年カムチヤツカの掌院ホコウンチエウスキーなる者は、修道司祭イヲサブを傳導に遣はせり、當時占守、イテウルプ二百五十三人の住民ありき、其中五十六人を洗禮して歸れり、而して少年敎化の爲め小學校を開設せり、

(一二)石川貞治氏千島巡檢雜記

第一章　千島アイヌに就ての參考書

東京地學協會報告第十六年第三卷にあり、石川貞治氏が明治二十七年に千島を巡回せらたることを記す、本文は主として地質學上の調査なれとも、左の件は吾人の最も注意すべきものなりとす、

氏は云へらく擇捉島シャナ市街に竪穴の痕跡ありて繩紋ある土器の破片夥多しく散在す、又郡役所よりシャナ橋に下る處の崖端に骨層あり、海獸の骨骸と覺しきもの地中に堆積し、此中より土器及石鏃の破片を發見せるものあり(報告一二一頁)

こはミルン、ヒチュコックの文と互に比較すべきものとす、

尙氏はシャシコタン島の所に記して云へらく(一二九頁)小屋の側より繩紋ある土器、石鏃、其他赤及び綠色を用ゐ草花を畫きたる磁器の破片を得たり、磁器は本邦製の者と思はれず、或は露人も居住せるとあるか、又は土人が露人より得たるものか詳ならず、此地の穴居はシュムシュ島に於けるものと同一なるが如きも著しく廢滅せり」この文は大に參考すべきものにして、同島には確かに石器時代の人民の棲息せしこと是に因て知るを得、

(一二)ミルン氏　Notes on a Journey in north-east Yeso and across the Island.

ロンドン地學協會報告第三卷中にあり、本文中吾人に最も必要なるは二六―二七頁に於ける人類學上の注意是なり、

氏は云へらく、札幌、室蘭、釧路、及び千島諸島に竪穴の遺跡存在す、アイヌはこれに就て云ふ、この遺跡は彼等と曾て戰ひし所のコロボックルの手になりしものなりと、余は擇捉島にて數百の竪穴を實見せり、且つ千島の最北、シコムシュにて千島土人の竪穴に現在棲息するを實見しき、是等の千島土人は現今日本政府の治下の民となり、千島の最南色丹島に移され、人口は總計僅かに七十人許なりとす日本人は南方に於てアイヌと會し、これを北方に追へり、アイヌは北海道に於てコロボックルに會し、彼等を再び追へり、彼等の殘物は蓋し千島土人乎、されど千島土人は今や殆んど絕滅せんとする運に至れり、

以上はミルン氏の說なり、氏の亞細亞協會報告に記せられたる千島土人の文と兩者對照比較すべし、

(一四)長谷部氏時任氏千島巡航概記

明治九年開拓中判官長谷部辰連、同五等出使時任爲基氏等が官命を受け千島諸島に航したる時の記行なりとす、こは轉載せられて東京地學協會第十四、第十五兩年報告中にあり、今回書中記する所の大概を記せば左の如し、

氏等が千島に航したる際には、千島アイヌとアリウトの二種族住居せり、前者は主としてシムシュ、シャンコタン、オンチコタン、にありて、後者は全くウルップ、シムシルの兩島にあり、二者とも固有の言語を有し、又傍ら不充分なりと云へとも露語を解す、而して二者の住所は共に竪穴にして、アリウトにては皮張船を製作使用す、二氏はシムシュにて彼等の祖先は曾て南方千島より移住なし來り

第一章　千島アイヌに就ての參考書

しことを聞きぬ、この傳說は引用せられて小金井敎授色丹土人傳說(アイヌ論文第二卷二九九頁)にありこの報告はこれまで本邦人に多く參考として用ひられたるものにして、かの海軍省の千島航路誌、郡司、笹森兩氏の探檢誌にも出されたり、而してこの報告は明治九年の紀行なれば、ミルン氏、スノフ氏の文と互に對照すべきものなりとす、

(一五)千島群島地略誌

この書は明治十九年廣田舊根室支廳長が色丹土人、ヤーコフストローゾツブ、クブリアンストローゾツブの兩人を支廳議事堂に召し、千島諸島の事を聞き取りたる記錄なり、本書は又人類學上の參考とすべきものなりとす、兩人の語る所によれば、色丹移住前彼等の千島に於ける本居と定めたるはシムシユにして、時々水陸の鳥獸を逐て縱橫群島內を獵涉せしが故に、群島中漁獵の要所には假屋を構へたり、今其語る所の著明なるを記せは左の如し、

ポロモジリ島、二十年前にはハカバリウに九戸、ペードフに四戸の土人舍ありたり、
オンチコタン島、テシコタマイに土人舍四戶、アシリメンダリに土人舍若干あり、
シヤシコタン島、モイスートには土人舍七戶あり、
ラサワ島ヲレシチプイに九戶の土人あり、會長ヤーコフの本陣は玆なりき、
ウシヽル島、土人出獵小舍五戶ありき、

千島土人は由來水草を追ひ、鳥獸を獵涉し一定の永住を好まざる種族なり、彼等の遺跡が千島各嶼に存在する又宜なるかな、

(一六)ポロンスキー氏千島誌

この書(一八七一年出版)は榎本子爵が露京滯在中これを飜譯し、傍らクルゼンスタルン、ゴロウニン等の著書を參照したるものにして、苟くも千島のことを云はんとするものは、本書を一讀せざる可からず、されど本書は版本として世に存在せず、余は大學より公の手續を經て外務省より借用し、榎本子爵の同省へ納めたる原書を讀みたり、

本書は寫本都合四冊あり、人類學上最も必要なるは第一、第二の兩冊なりとす、第一冊は最初に千島の地理、物產を記し、人種、風俗、宗敎等に移り、これより露西亞人の千島に關係する歷史を記し始む、第二冊は前冊に續きたる歷史を記す、第三冊以下は又第二冊に續きたるものなれども其記載はウルップ以南我北海道、との政治的交涉史なるを以て餘り人類學上の參考となるものにあらず、

同書に記する所によれば、哈薩克の始めて東察加に到りし時、土人より聞くに千島土人を遠近の二つに分てり、其近をウイウトエスケ、其遠きをアウンクルと云ふ、前者はシユムシユ、ポロモジリの兩島及び東察加半島の南部に在る土人を云ひ、後者は其以北にある土人を云ふ、

東察加半島、バルショイ及アヌチ河以南、シユムシユ島に居住せるクルリ人は固よりクリル人種にあ

らざれども、クリル人と近く交を結びしより風俗言語を更め、固有の名を失ひ、顏色容貌に至る迄クリル人に化すに至れり、是等の土人はカムチヤダールと同一にして屢々小船に乘りて同種のカムチヤツダールを侵掠し彼等を震慄せしめたることあり、然るに哈薩克の東察加に來住せし以來、クリル人の外侵を抑制し、カムチヤダールは哈克薩と共にクリル人を襲ひ南進し他の島に迄到りし事あり、當時クリル人は往々遁れて山に入り、又はシユムシユ島の山谷にも多く遁入たり、この土人は元來其數多からざりしが、一七六八年に東察加より疱瘡流行し來りて更に人口を減じたりと云ふ、以上に據て見れば千島の最北端にはカムチヤダールに類似せる土人の棲息すを知る

パラムジル島に住める民は純粹のクリル人、即ち毛人（モウヂン）にして、此民は元來ヲンテコタン島、並に其以南の諸島より移來りし者なり、而して此土人は多かりしが其後他の島々へ轉住せしを以て其數を減ぜり、遠島のクリル人を露人の始めて知りしは、東察加に漂流せし日本人の話にて聞き及びしなり、クリル人は己れの何種の人種に屬するを知らず、自からアイヌと云ふ、而して自から我は某島のアイヌなりと稱す、此語遂に全諸島人種の總稱となれり、クリル人は他の北方の民と異なりて壯年に及べば肢躰に黑毛の深く生するを以て毛人の稱を得しなり、

以下彼等の衣、食、住、宗教、器具、口碑等を精密に記載し、遂に編年史に移れり、

この書の記す所に因て見れば、露人の最初千島に到りし際には二種の土人棲息せしものゝ如し、一は則ち稍やカムチヤダールに類する者、一は我北海道、唐太のアイヌ種族に類する民族なり、現今の千島土人はこの二種族の雜合せるもの乎、將たこの二種の中一種の存在するもの乎、大に注意すべきことなりとす、

同書中、土俗を記する條、人類學上參考とすべきもの多けれども、就中左の數件は最も注意を要す、

其記載に曰く「其矢は葭を以て篦とし、石又は骨を以て鏃とせるものなり——兵器は元來石、又は骨類を用ひて造れる者のみなりしが、後來漸く變じて鐵となしたり、弓矢も其隣人と相戰ふことの止みたるより殆ど不用に歸し、海獸海鳥を射るにも今は多く銃を用ゆることゝなれり」

尙ほ第二卷は千島各嶼の地理物產のことを說けり、其中に左の件々あり、クトイ島、一ゴロウイン氏の記に曰、「上陸せし際島中粘土あり、穴中に靑色の粘土あるを見る、人の發掘せし跡なるべし」

「シムシル島、—チリボイ島の方へ差出たる岬上にアヂイウシ山あり（北緯四六度五〇分東經二〇八度四分烟焰常に斷へず）此山に一種の石あり、土人は鐵に代て鏃とす、」

その二條は前の石器と共に深く味ふべきものとす、ケトイ島の粘土は是れ或は千島より出づる土器製作の原料にあらざる乎、シムシルの石は黑曜石なること明かなり、

以上は唯だ千島誌中記する所の一二を略記せしのみ、要するに本書は最も有益なるものにして千島の人類學的研究をなすものは是非とも熟讀すべきものとす、

書中の概要

(一七)榎本子爵千島疆界考

東京地學協會第十四、十五兩年報告中にあり、ポロンスキー氏クリル諸島誌の續編として出されたる者にして、書中の記事は主として日露交渉政治史なりとす、其書中の材料は主として本邦の記錄より取りたるものなり、千島の沿革史殊に千島に於ける日露交渉史を知らんとせば、この書は最も必要なるものとす、

書中概要

(一八)チャムバレン氏文科大學紀要第一冊第一號

この書の千島に關し必要なる點は本文にあらずして反て附錄の部にあり、氏は蝦夷島アイヌに關する諸書の目錄を揭げ其出版年月、記事概要を併せ記されたり、(一三七—一七四頁)德川時代の千島に於ける本邦人の仕事を見るには此書は最も便利なるものなり、

(一九)水科七三郎氏色丹アイヌの單語表

氣象集誌第十一年第九號にあり、氏は明治二十四年和田雄治氏と共に北海道巡回の傍、色丹島に立寄られたる際、同戸長和田良成氏より色丹土人の氣象に關する單語を多く聞き取りて書き集められ一覽表とせられたるなり、千島土人の言語を研究するには參考とすべきものなり、

復命書

(二〇)得撫外二郡巡視復命書

この復命書は明治十一年八月開拓使官吏井深基氏が手になりしものなり、この報告は明治九年長谷部氏等の千島巡航概記(一四)に次て參考とすべきものとす、

井深氏が玄武丸にて占守島モヨロップ灣に到られしが、茲には最早一人の住民なかりき、されば當時は已に露人等は本國に歸りたるものなり、而して當時千島土人は同島のペットポに棲息し、其時同地にありたるものは男女合して二十二人なりき、

ミルン氏が占守島のペットポを訪ひしは又明治十一年にて、其人口も同じく二十二人なりき、玄武丸は占守島を去て新知、得撫兩島を訪ふ、こはこの二島に住するアリウートを訪はんが爲めなり、一行は上陸せしも已に人影なく、只だ彼等の穴居跡を存ずるのみ、

以上に因て見れば明治十一年には新知、得撫兩島に住するアリユウト種族は、其前年にこの地を去りしものと考へらる、

この復命書は、文簡單なりと雖ども大に參考とするに足る

以上余が今日までに讀みたるものなり、尙ほ郡司、笹森、多羅尾諸氏の近時出版の千島に關する書も參照す可し、千島に關する德川時代の書籍のことは別に記載せんとす、

位置、地形、氣候、植物

第二章　千島地名解

抑も千島群島は北は露領、東察加に接し、南は北海道の根室を以て界とす（北緯四三度二六分―五〇度五五分）島數小なるものを除きて都合二二、群島の形狀は稍や弓狀を呈し、長さは凡そ一八〇哩、地質は主として火山岩よりなり、今尙ほ活火山あり、氣候は北部最も寒氣甚しく、南部は稍や溫和にして、植物の如きは尙ほ北海道帶のものを見るを得べし、北部は僅かに灌木草苔の類の繁茂するに過ぎず、

千島アイヌ　蝦夷アイヌ　アリウート

千島諸島に棲息する人類に三種あり、一は本島固有千島アイヌ、二はアリウート、三は蝦夷アイヌ是なりとす、而して一二の人種は共に互に獨立し、二者主としてシムシル島以北の北千島に棲息し、三は全く國後、擇捉等の南千島に棲息す、（余がこれより記載せんとするものは悉く北千島のもの而已に限る）

アリウート

アリウートはもと千島に棲息なし居らざりしが、露政府は曾てアリシャン諸島より彼等を千島のウルップ、シムシルの兩島に移したり（千島土人の語る所によれば占守島のマヨロップ灣にて、曾て露人は彼等を移せしとありと云ふ、今尙ほ其墳墓も存在す）（アリウートは千島唐太の交換と共に千島のシムシル、ウルップ島を立去りたり）千島のウルップ以北の群島は露領たりしが、一八七五年四月のペテルブルグ條約の結果、我國は唐太島を讓り、遂にこの全島を交換、我領土となすに至りぬ、而して一八八四年、則ち明治十七年を以て

北千島に棲息する九七人の土人を我政府は色丹島の斜古丹に移せり、是に於て始めて北千島は全く無人の境土となり終んぬ、

千島全部名稱

千島は露人はこれを Kyparbekie ocmpolba と稱す、クリルとはもと露語の Kypirb 則ち「烟を吐く」と云へるより轉化せしものならんと云ふ、余はこの說を正しと考へらる。さて露人は最初千島の最北に東察加より渡來せし際、其活火山の烟を吐くを見て、始めてクリルチの名稱起りたるものゝ如し、この名稱は露の南進と共に次第々に千島全島の名稱とはなるに至りき、ボロンスキ氏の千島誌（卷の一枚）に斯く記しぬ、

此諸島各箇別段の名はあれども總名はなかりしなり、其「クリル」と呼ぶは此諸峯多くは常に烟を吐を見て我哈薩克等が「クリル」（露語にて（クーリイチ）と云ふは烟らすの意也（クリル）とは其轉じたるなり）と呼び稱へ來れるなり、其名の今に存じて衆人稱る所となれるは人背常に烟霧其諸峯を圍めるを見るによりてなり、

さて我國にては古くこの島を何と稱へしや、「千島」とは固より始めよりありたる名にあらず後世の稱なり、天明寬政の頃、我國に南千島の事起りし際には、共に蝦夷アイヌの名稱を取り用ひて、チユプカと呼びにき、其は當時の「邸弟加考」にて知らる、

東海得撫島ヨリ前路、新知島ヨリ東察加地方ニ至ルマデ、凡千餘島ミナ丑寅ニ流ル、所謂千島ニテ

夷人之ヲ稱シテちゆぶかト云フ、ちゆぶかトハ、日出處トイフ義ナリ、

チエプカは Chup-ka にてアイヌ語の「東」を指せる言葉にして、主として蝦夷アイヌの稱ふるものなりとす、

シムシル島以北に棲息する千島土人は己の住する所、則ち千島を何と稱し居るや、余は未だ我國諸先輩のこの疑問に向て解譯を試みられしものあるを聞かず、こは必竟天明前後我先輩、最上、近藤の諸氏は南千島のみ旅行せられ、北千島（日本人の旅行の最北にはウルップ島なりきに行かざりしを以て彼等（ラサワ島の歸化人は除く）土人に就て聞く機會を得ざりしが爲めなり、而して南千島に棲息する土人は悉く北海道にある蝦夷アイヌと同一なれば其千島を呼ぶ名稱も敢て異なるなし、（余は今回擇捉島留別の蝦夷アイヌの老女に聞くに、彼女は北千島を Chup'ka と呼び、其人を Chup'ka-kuru と稱へき）余は幸にも今回千島を旅行し、且つ久しく其土人と生活を共にせしを以て、彼等が自身に稱する千島の名稱は稍やこれを確かむるを得たり、

會長ヤコーフは左の如く千島諸島を稱しぬ、

東　Chup'ka　東察加

- シユムシュ島
- ポロモジリ島

東 Chup'ka

千島アイヌの稱する名稱

西 Rūton

- ヲンネコタン島
- ハルムコタン島
- シヤシコタン島
- マツワ島
- ラサワ島

北? Shimrudàt

- ウシヨシル島
- クトイ島
- シムシル島
- チリポイ島
- ウルップ島

Yawani

- 擇捉島
- 國後島
- 色丹島
- 北海道

尙ほグリゴリーに從へば、時としてラサワ島以南を Samuru と稱し、又其人を Samuru-guru と云ふ

千島アイヌの名稱

カムチヤダール

ことありと

以上に據て見れば、千島土人は東察加より北海道に至るまでを方角を以て名命せり、下にあるは小區別にして、上にあるは大區別なり、千島土人は多く上の大區別の方を常に用ゆるものゝ如し、されば千島土人は自からの地を Rūlon と稱し、東察加を Chup'ka と云ひ、ウルップ島以南、北海道に至るまでを Yawan と呼べり、

千島アイヌ名稱

千島土人は自から住へる島をルートンと呼ぶを以て、自から自身も又 Ruton-mon-guru 則ち「西に住へる人」と云へる語を以て彼等種族を云ひ現はすものとせり、

蝦夷アイヌは彼等を Chup'ka-guru と云ひ、露人は彼等を Kurileie と呼び、他の歐米人は主として Kurisky Ainu を以て呼べり、

千島土人は單に Aino と呼ぶことあり、則ち「人」と云へる義なり、この發音は或は Ainu の誤にあらざるかと、露字をよくせるヤコーフ、ゲラシム等をして露西亞文字を以てこれを綴らしむるも、何人も皆 Anno と書せり、因て余はこれに從ふ、

千島土人は東察加のカムチヤダールを呼ぶに Chup'ka-an-guru を以てし(東方の人)又 Kam'chidaru 若しくは Kurumushé, Oyatāru の名を以てす、

蝦夷アイヌ

コサック侵入當時の千島

アリウート

日本人蝦夷アイヌ

蝦夷アイヌは千島土人よりは、南方にあるを以て、其名稱を Yam-guru (南方の人) と呼べり

千島誌卷の一、七葉に曰ふ、哈薩克の初めて東察加へ來りし時、土人より聞くに「クリル」人は遠近の二つに分ち、其近を「ウイウトエスク」(土語なるべし)其遠きを「アウンクル」(同上)と云ふ、近とは第一、第二の島人及び東察加半島の南部に在る土人を云ふ、此土人固より「クリル」人種にあらざれとも「クリル」人と近く交りを結びしより我風俗言語を改め固有の名を失ひ顏色容貌に至る迄「クリル」人に化せり、

この千島誌、記するコサック兵の當時聞きし遠人アウンクルとは、全く Yam-guru なるや明かなり、これに因て考ふればコサックの千島に來りし當時は、ヤムグルはヲンチコタン島まで來り居りしを知らる。ヤムグルとは蝦夷アイヌを總稱する言葉なるを以て、この話は最も注目すべきものとす、而して現今の千島土人はヤムグルは擇捉以南北海道に棲息する者とせり、

アリウシヤン諸島に棲息するアリウートは土人は尙ほこの名を以て呼び、且つ昔話中彼のことあり、

然らば彼等の人種名となり居る Aleut の名は古きものなりと云ふ可し、

日本人をば現今露語によりヤツポンスキと稱すれども、又古くよりニッポンの名を呼べり。されど多くは Yam-shisám の名を以て呼べり、

千島各島の名稱

島内地名

千島アイヌ諸君

居住地

こは余が旅行中、千島土人の補助を得て編みたるものなり、これを別て「島名解」及び「島内地名解」の二部とす、「島名解」は千島土人グリゴリ、グランム、アウエリキ等より聞き取りたるものとす、古來千島の地名解類似のものは邊要分界圖考、久夢日記等あり、又近くは岡本柳之助の日露交渉北海道史論あり、讀者諸君は是等をも參考あり度し、

「島内地名解」に至ては從來人の試みざりし所、此調査は恐らくば余を以て始めとするならん、本文を草するに就ては千島土人中、左の人々より有益なる補助と注意とを受けたり、茲に其好意を謝し、併せて其功勞を公言す、

占守島の部　副酋長アウエリキ及びゲラシム（此者は數年東察加のペートルポウルスクの學校にありて露語をよくす）の補助に因てなれり、別に兩人の手になりし土名地圖あれども茲に出さず

波羅牢石利島の部　ニキハルより聞けり、同人の手に成りし土名地圖あり、本篇に掲げたる圖是れなり、同島の地名は主として東南北三方のものにして西部は同人知らざるを以て記入せず、後の地名解を編む人此缺を補はれんことを望む、

捨子古丹島　酋長ヤコーフの實弟ラウレンチ（土名圖をも作れり）より聞けり

羅處和島　ラウレンチ及びグリゴリより聞けり（土名地圖あり）

千島土人は北は占守島より、南は新知島間の各島嶼に移住往來なし居れども、彼等の平生の住地

村落に關しての言葉

島名解

占守島

（Kotan ba）は占守、波羅牢石利、羅處和の三島にして、他は彼等の移轉往來の漁場（Onrukusushi）たるに過ぎず、されば千島各島嶼地名解中、以上三島は吾人の最も注意すべきものなりとす、これまて世人は平生の住地を占守、温禰古丹、捨子古丹の三島なりとし、眼中波羅牢石利、羅處和を存ぜざりしは大に誤れり、

ラウレンチ及びセチフヌンドは曰く、村に左の名稱あり、

Beshipo　河なくして村のある所

Betopo　河の沿岸に村のある所

Kotan ba　村のよさ所

Kotan keshi　村の端

島名解

千島土人は古くより北は、占守島を限り、南は新知島を界とし、其間の各群島に棲息往來なし居るを以て、彼等は千島に就て以上群島外の名稱、及び島情を知らず、今彼等が知れる占守――新知間の地名を記せば左の如し

（一）占守島　Shumushu

又一名 Shumuch と云ふ、古は Kushun kotan と稱したり、即ち「人の始めて出たる所」の義なり、

波羅牟志利島
阿頼度島
磨勘留島

(二)波羅牟志利島　Parnmoshiri
土人は Poro-moshiri (大島) と云ふ、又 Uréshi (人を多く育てる所) Nubeu-moshiri, Sesebumoshiri とも稱せり

(三)阿頼度島　Alaid
アライドとは露人の下せし名稱にして、土人は Oyakobakka 若しくば Chacha kotan と云ふ、前者はカムチャッカ土人を Oyutaru と云へば、これに關係ある名ならん、後者は阿頼度が海中に富士山形を呈し高く亢立するより、チャチャコタン即ち「老ひたる」島と稱するに至りしならん
土人の傳ふる所によれば、太古この島は此處に無かりしものにして、元カムチャッカより飛び來れり、最初アライドはカムチャッカ半島にありて諸峰中に秀でたり、さればアライドは常に諸峯中妬みを受けたれば、後の恐れもありとて遂に此處に飛び來りしものなり、彼の飛び去りし跡は忽ち湖生じ、今日のクリール湖をなすに至れりと云ふ、この話は又ボロンスキー氏の千島志中にも記載せらる

(四)磨勘留島　Makanrushi
又一名を Kokumetra と云ふ、
この島、古は無かりしがオンチコタン島の Pii-moi-to 沼より Katrnokuru なる神、手にて拔き取り此島に投げ出したるものなりと云ふ、この神がかくなせしは、最初この沼に夥多しく鳥獸の寄り集

温爾古丹島
春牟古丹島
越渦磨島
知林古丹島
捨子古丹島
牢知島

より來りやかましかりし故なりと

(五)温爾古丹島　Onekotan
Onne kotan にして即ち「歳古りたる島」と云ふ意、古は Nusa moshiri 即ち「木幣を樹てたる島」と云へり、

(六)春牟古丹島　Harum' kotan
「ハル」とは百合草のことにて、ハルムコタンとは百合の多くある所と云へる意味なり

(七)越渦磨島　Ekarruma
古來かく呼ぶ、

(八)知林古丹島　Chirin kotan

(九)捨子古丹島　Shiáshi kotan
一名Tūki-moshiri 酒器島と云ふ、昔日本の船この島に流れ來れり、船中酒を多く登載しき、土人はこれを飲みたり、故に斯く名づく

(一〇)牢知島　Móshiri
二島名あり、一を Haito-mindru (人間の居る所)
一を Pirarn-mindru (トド獸の居る所) と稱す、

(一一)雷公計島　Raikoké

草木無きはだか島にして、土語 Raikóké とはラッコ獸の居る所の義なり、

(一二)松輪島　Matua

土人 Matowa と稱す、別に一小島あり、Matukuwashi と云ふ

(一三)羅處和島　Rashua

(一四)宇志知島　Ushioshir

太古にはこの島無かりしが、雷神 Kamuni kamui この島を作り、天よりこれを降せりと云ふ、而してこの島を又 Kamui karu moshiri「神の作り給ひし島」と云ふ

(一五)計吐夷島　Ketoi

古より斯く云ふ

(二)島内地名解

占守島の部

Pet' topó　川の沿岸に村ある所

Toichi ushi　穴居の多くある所

Tentem uiri　小川と大川との間

Mirinchi　蓆を作る草を採る所

Chakó musút　洪水の爲めに逃げたる所

Rikim　山へ登る所

Chep'pet　魚の多く居る川

Raishishi　出さき

Moinrobú　人が住居せし所

Yaichishi　網にて鴨を捕へたる所

Ekapam'ro'm　薄く出たる岬

Fari natara　赤き石(四個あり)が柱の如く出て立つ所

Cherashin　山の方が出て居る所(大勢にて此處に登り直ちにこれを越へしと云へり)

Okót　深き澤

Icho'ruri　人を落したる所

昔時 Kamchadale 占守の此所に來り上陸せんとせり、時に Kurilche これを知り、大人數にて密に傍に隱れ潜みぬ、彼等はカムチャツカ土人の上り來るや否や一整に討ち出たれば、敵はこれに驚き逃げ、出し岩上より海中に落ち入り死せしもの其數

を知らずと云ふ、Ichiórui の地名ある、全くこれが爲めなり

Agashiriki　狐を數多捕ふる所
Poro etu nót　大岬
Onno etu nót　小岬
Ichikushi　岩より水の流るゝ所
Fūrat' moi　昆布の數多流るゝ灣
Tanne kutupuku　長き岩窟
Maun pōró　穴開き居る岩窟
Sukususu moi　溫かき灣（風を受けざる港）
Sayaki　港（船を寄する砂原）
Kahuro pira　ゴメ鳥の多く居る岩
Shunin pira　低き岩
Not' moi　岬なる灣
Chirō pira　鴨の數多居る岩
Pit' sáki　石原

Piruturu　岩の間
Parachirui　夥多しく鳥の居る所
Sausan eliep　大人數山上よ下り來る所
Keómukaru　岩の斧、岩の形狀、斧Mukaru に似たるを以て斯く名づく
Sukusu moi　日のあたる灣
Chirumokai　小川
Fari pét　人の住居せし川
Moyaróp　船の集まる所
Tukatúk　高き岩
Uriró wakara　鵜の夥しく居る所の岩
Temukutu　高山
Poro wakara　大なる岩
Tun'naish'i　弓にて人を射殺せし所

昔この所にてカムチャッカの土人と激しき戰をなしたる所にして、互に血戰の結果死者の血は流れて水上一面に紅になりしと云ふ

Sekók	惡水（小沼）
Shitókói	山
Sonnshi	下り坂

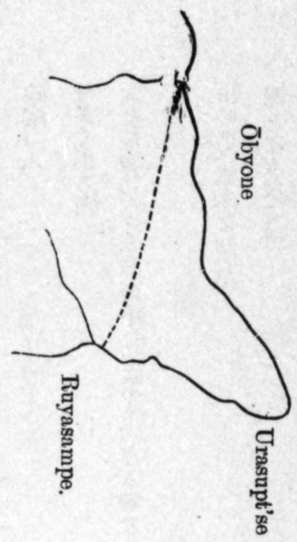
波羅牟石利島の部

Tuima	トッカリの居る所
Chiboi moi	うねつて居る灣
Kotan ni	村落
Shinnkareshi	上へ登れば何處までも見ゆる所
Chiru ura	運びし所（古の人物を）
Shi betopó	大なる村落のある所
Susu pét	柳樹のある川
Kiruru pét	魚の上る川
Kumusu pét	川の中のはじけたる所
Shirusukusu pét	川が山の近くより流れる所
Ogosokamsú pét	ジャコ魚の上る川

Masakin	?
Pon nupuru	頭の小さく尖りたる山
Kanjanke	?
Hururani	小丘の濱に向て低くなる所
Taiberi pét	瓦木の生へて居る川
Atuwatuké	?
Kayakanō pét	燕鳥の多く居る川
Uatarasuké	岩ある所
Nasanke	?
Tōrūki	?
Oto moi	砂濱
Noju	古語にして意義不詳
Heukure	?
Sakumaya	石ある所（海岸の前に石あり）
Tahukohu	小山

Chinokamrum	此岬の端が同島の Raishishi 岬より見へるが故にかく云ふ、Chino とは見の義	
Ni yarasuki pét	木の多く生へて居る川	
Toikeshi		
Rebun iso	トッカリ獸の居る所	
Moshiri	島	
Umekaya	?	
Huráť moi	昆布腐りて臭ひ惡き灣	
Koyo moi	浪ある灣	
Tomisaurnki	?	
Pasukoroina poina	鳥の石	
Hayanki	?	
Chiyake	鴨	
Shiyajinki	古はこの岩上に鷲巣を作りたる所	
Omoshirope	前に小島を望む所	
Koisaurak iso	トッカリ獸の居る所	

Rausukom	?	
Rayasampe	甲の所より乙の所へ下る所	
Urasuputs'e	上より人が下る所	



傳へ云ふ、昔カムチヤダール大人數 Ruyasampe に船を寄せ上陸し Obyone に到る、然るに千島土人は途中にてこれを見たり、自分の今小人數なるを以て敵し難しと思ひ、遽かに Urasupts'e の岩下に匿れたり、カムチヤダールはこれを知らずしてこの所より下り歸りたり、これにてこの所を上より人が下る所を云ふ

Kikikirabi chiboini	小蟲の居る所で船をつける所	
Obyone	?	

Kotó nakó	?	
Hashiri inao ushpe	木の枝 Hashiri にて幣を作り樹てある所	
Pinshishi	?	
Shunu pira	高き岩	
Monkorotuke	山嵐の甚しき所	
Etu su moi		
Otó moi	砂濱	
Not' uiri	岬多くある所	
Poro nót	大なる岬(Nót uiri の中にて最も大なる岬なるを以て斯く云ふ)	
Sakomusliki	?	
Shiriyashiri	山の名(意味を知らず)	
Moyoró	灣となり居る所	
Hót chishine	?	
Omō kot	川上に最早淵なき所?	
Hak' chiboine	淺き港	

Paikaipi	石の形狀子供を背負へるが如し	
Charasu pét	岩上より落る川	
Obusu pét	川口に大岩あり、故にかく云ふ	
Eriko	?	
Katarē	?	
Onne pét	古き川	
Kabare nóshichi	カバレ崎	
Ibisakuseraru	?	
Uan iso	水中に入りてトッカリ獸を漁する所	
Otem' rum	岩が砂より出てをる所	
Uashi' ane	?	
Yamke chiboine		
Rebunke chiboine		
Raishi iso	トッカリ獸の居る所	

捨子古丹の部島

第二章　千島地名解

Oehiboi. 木の筏にて前の岩にかゝり海獸を漁す

Shirarukasuwataru. 海水退くと岩柱の高く現はるゝ所

Etu pirikoi ヱトピリカ鳥の居る所

Rabo moi. 磯の出たる灣

Mát. 常に靜かなる灣になり居る所

Usani. 村(Chionikima moi.)の傍の少しく出て居る所

Etu moshiru. 岬の急になり居る所

Oririubuku. 濱より少しく高く傾き居る所

Kansharu moi. 僅かなる灣

Pouru nót. 岬の下の方に岩穴のある所

Moi sait. 最も多く人の住みし所

Kashirui moi. 古來船に用ゆる帆柱こゝへ流れ來る、この流木を以て帆柱に作りたる所

Kainishi. 流木の多く寄り來り居る所

Poro niyoi. 長岬

Tonne sara not.

Pokiri iso. 白アザラシの常に居る所

Akushi. 鐵砲を發する所

Kuika. シギ鳥の澤山居る所

Onita. 横岩が立つ所

Sheshiki. 溫泉のある所

Teshikayát. 岩丘の方に村ある所

Karo mui. 火打石の澤山ある所

Iturulusu moi. 山芋の如きものゝ多くある所

Hamkabe nót. 山の爲めに岬が出來た所

Shiokaibi 古昔茲に船來りて、船人上陸し石上にて大便をなせし所

Pi poro nót. 少しく出張りて居る所

Porâsa. 岩下に石の立てるより、中に孔あり、これにトヾ、ラッコ等上り居る所

Masa shiru.

Etu-pirikoi. ヱトピリカ鳥の居る所

Poro pi. 石上にラッコ上て居る所

Awashi pashipi. 小さな石の上にラッコ集り居る所

Kabari iso. アザラシの上り居る平たき磯

Wau iso. トッカリ岩上に居るを獵人船を用ひずして渡り行く所

Kokó noshi. ッポ貝の磯に數多集つて居る所

Tokon pét. 棒を持て川を越へた所

Sham' so' 夜間燈火を以て漁する所

Rebun iso. 少しく沖へ離れアザラシの居る所

Rurram' buit. 前岸村落より下り途

Shiarusu pùt. 岩上より流るゝ川

Uwa iso. 渡つてアザラシを捕ふる所

羅處和島の部

Toi' man 中凹まずして灣になり居る所この語は元と "Toiman moinukuru" にしてかくつゞめて云ふ

Chiuki shim iso. 常にトゝの上る所

Ereuke' nót. 曲りたる端

Khokoshi mui. 退潮になればッポ貝 Khoke のある所

Chiashikóts. 砦のある所

昔蝦夷人 Yam-guru 茲に來りしを以て彼とこゝにて戰をなせり。この砦はこの時用ひたるものなりと云ふ、

Moshiri Keshi. 村名

Nubushibe. 上に草生へて居る所

Orusarubi. 上に草も何も生へて居らぬ磯

Kamcharu moi. !

Not' pó. 長岬

Ni omoi. 流木の流れ上る灣

Wichit'kanoehi. ?

Harot'not. トッカリの多く居る所

Kamoi lii 小さな鴨の多く居る所

Rososii. 小さな鴨の陸へ多く上る所

Kamoehiri boina. カモが岩上に常に居る所

Eteship'iso.　夏期トヾの上り居る所

Konda.　?

Pashikuset'shi　鴉が常にこの端に來りて玉子を產む所

Tukoro hokipi not, アザラシ茲に澤山上り居る所

Ebaru kut.　村落。又一名 Moshiri-ba と云ふ、此澤の兩方に古代の竪穴 Hoshikoehe. の跡存在す

Unii'tape'　鳥の數多玉子を產む所

Yonokarupe'not.『男女の陰部を見たる』所?

この所は高く凹みたる岩よりなれる海岸にして、土人は常にこの岩穴にかくれ鴨を獵す、昔は男女共股引なかりしを以て、この岩上の間を通行する際、下に居る人は上の人の陰部を見るを得たり、されば今日にも尙ほかゝる地名存するなり

Ikiu rososhi.　小さき鴨は度々人に捕へらるゝを以て鴨はずるくなり、容易に茲に來らず、されば Ikiu(ずるくなつて) rosashi(居る所)と云ふ

Ekap' ke'not.　細き端の出て居る所

Onna'aka'.　高き岬の下より大なる岩の出て居る所

Aku'iru.　端が二つ出て居る所

Pon aka.　小さき岬

Toiroiirlii　地上に小鴨澤山上がり居る所

Pichinrusui.　草なく石ばかりの上に鴨の居る所

Sumuiri.　水中に岩ありアザラシの常に居る所

Kut'iri　高き岩の周圍に帶の如き線のある所

Shirarukasu wataru.　退潮になれば岩柱の現はるゝ所

Sonopu.　大なる圓石の一つ座り居る所

Toruru umushi.　陸より海岸の岩まで距離近ければ Tanari 皮紐にて橋をかけ渡る所

Chiarushi'pet,　流れ河

Pon pira.　小岩のたち居る所

Chinrake.　?

Orikat' kuruka.　石の輪になり居る所

Moshishi. moi　波のなき灣

Ike'ushi.　一方平かにして一方薄くなり居る所

東察加半嶋ロバートッカ岬クリルカ湖邊の地名

本章は曾て東察加半島に屢々狩せし千島土人副酋長アウエリキに因て編したるものにして、北千島の調査には最も參考とすべきものなれば、茲にこれを載す、土名地圖あれども茲には出さず、

Shirarubo(千島語)ロバートッカ岬に最も近き所にして此所よりカサマシケの間に二三の河あり是等の河畔には竪穴の存在する多し、

Kasumsahike(千島語)河の左側に竪穴の跡あり、

Chirotoi(千島語)トンダガ河の右側にあり、此所に沼あり、其邊鹿多し、竪穴を作る爲め土を掘り取り他へ運びたる跡あり、其跡は凡そ千坪位もあらん、又この邊竪穴の跡多し、

Tontoga bet(千島語)河名、この河とノットスーとの間に竪穴の跡二三あり

Iso yam bét(千島語)トンダガ河の前、海岸にある岩にしてトッカリ常にこの岩上にあり

Not' susu(千島語)河の左側に竪穴の跡多し

Ibaropó(千島語)ノットスゝとルットチシナイベッとの間、海岸に出てたる小さき一岬なり、意味は「トゝ居る所」

Rut' chi' shinai pét(千島語)この河の上流に溫泉一ヶ所あり、又この河の左側に竪穴の遺跡あり、

此河はカムチヤダールはこれを Pereseika と云ふ、Osomashike(千島語)一流の河あり、

Eruchi kau こはカムチヤダール語にして(kau は河)一河あり、左側に少しく竪穴の穴あり

Tōsom(千島語)一大沼あり、この沼より一河海に注く、この河の兩側には竪穴の跡多し、

Kani moi(千島語)蟹の多く居る所の意にして、少しく岬となり居れり、

Yáwen(千島語)凹き所の義にして一大河あり、水源は山上及びクリール湖より發す、有名なるクリール湖はこの附近(カライとイトヤーウエンの間)にあり、かのアライド島の拔け出たりと云へるはこの湖なり、

ロバートッカ岬よりこれまでの間は無人の地なれとも、茲に至て始めて人家あり、人家はクリール湖の周圍にありて、茲にカムチヤダールの家は十四戸あり各戸牛を飼養せり、一戸平均牡牛一頭牝牛四頭あり、又茲に露西亞人一人あり、

この邊ボクサ草の繁茂する多し、

以上はカムチヤツカのロバートッカ岬より、クリール湖邊までの、オコーツク海に面したる所の地名なりとす、

是等の地名、千島語よりなれるもの多きは奇なりと云ふべし、カムチヤダール語は僅少なり、こは千島

土人より云ふを以てかくの如く千島語の多きか、其れにしては一二カムチヤダール語の加はり居るは不都合なりと云はざるべらかず、

カムチヤツカ半島に千島語の存するは全くこれが爲め附近を以て一大獵場となしたるものゝ如し、

カムチヤツカ石鏃

千島土人の神話、古傳等に因れば彼等は昔日ロバートツカ岬

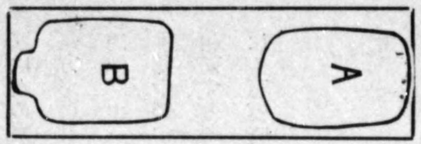
乎、考ふ可し、

尙ほ茲に注目すべきはカムチヤツカ半島に竪穴（Yurts）の遺跡の多きと是れなりとす、抑も是等竪穴の跡は何者の遺したるもの乎、こは今後大に研究すべき一大疑問なりとす、カムチヤダールは竪穴に住へるとはクック氏の頃より既に世に知られたる所にして、今日と雖とも尙ほ奥地のカムチヤダールはこれに住せり、されど今日 Yurts の存し居る場所にはカムチヤダールは棲息なし居らず、されば彼等が竪穴を作れりとて、未だこの單一なる理由を以て、この古竪穴も彼等の遺跡なりと云ふ能はざるなり、

千島土人も又竪穴を作るなり、而して彼等の古き竪穴は占守、波羅茂志里の各島にあり、一小クリー

ル海峽をへだつれば、則ちカムチヤツカなり、而して茲に又古き竪穴の跡存在す、若しも單に竪穴の遺跡を以てせば、カムチヤツカ及び千島互に連接せられ居れども、未だ是を以て互に等しきものなりや否やを斷言なし能はざるなり、

カムチヤダールの北に住へるはコリヤーク種族なり、彼等は馴鹿の皮を以てテント張りとし住するを以て竪穴に關係なく、尙ほこれより北則ち西比利亞の東端、イルカイピッジに住へるチユクチ種族はテントを張を以て己が住居とせり、



チユクチ種族の地に又ヲンキロン種族の竪穴の跡あり、

ベーリング諸島には又竪穴の住民あり、

アリウシヤン諸島には竪穴を以て有名なるアリウート種族あり、

アラスカ以北、北亞米利加の極端、グリンランド等にはエスキモー種族竪穴を作るあり、

カムチヤツカ半島の古竪穴は充分其地に至り、實地に人類學上の調査をなし、而して後少なくとも以上の諸人種と人類學上精密なる比較研究を遂げたる後ならでは容易に斷言なす能はざるなり、

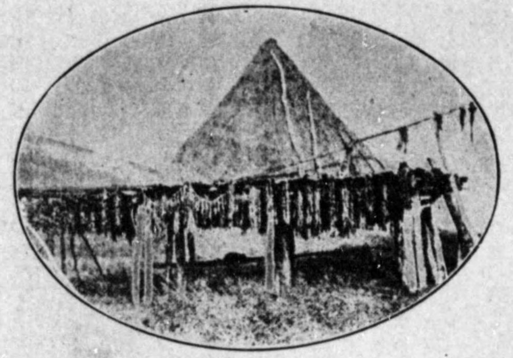
アウエーリキの語る所によればカムチヤツカ半島にて彼の實際に見たる竪穴の遺跡

の形狀は右の二種なりと云ふ、

Aは長方形にしてBは長方形なれども、一方に入り口あり、深さは各々二尺位にして、大なる竪穴は長さ四間、巾三間、小なるは長さ三間半巾二間位なり、其存在位置は共に丘上なり、

本篇中圖する石鏃は大さ圖の如きものにして、報效義會々員某氏がカムチヤツカ半島、占守島に相面する所にて獲られたるものなり、この石器は千島のものと相同じ、兎に角カムチヤツカ半島にも石器時代遺物の存在することは明かなりとす、

カラガ村土室の數と高小舍の數との比較



ペツロボウロスク

第三章　東察加半島及び其島嶼の土室と高小舍

本章はバルレットハミルトン、ヂョンの二氏が明治三十一年ロンドン地學雜誌第一二卷、第三號に記載せられたる「東察加カラギンスキ島巡回記」中より摘譯せしものにして、千島土人研究に付て大に參考とすべきものなれば茲に登載せり

ペツロボウロスク及びカラガ村の土室高小舍

東察加半島、カラガ小村は現今一七個の高小舍 Balagan と、六個の土室 Yurt と、別に一個の Flur-bogs を縫ひ合せ作りたるテント張よりなれり、人口は一個の土室に平均凡そ五人の家族あるものと見なして先づ三〇人許もあらん、高小舍は一個の土室に對し三個づゝ存在する割合なり、ゼームスキング氏が曾て東察加ペツロボウロスクにて實見せし所によれば、一個の土室に對し、高小舍六個の比なりき、

クック氏第三回航海記（一七八四年）著者キング氏がペツロボウロスクを訪ひし際には、其所には一九個の高小舍と三個の土室と

室七個の木造の家屋の存在するを見られたり、この木造の家屋は露西亞人の建築せしものなりと、而して同氏によれば高小舍は主として夏期の生活場として用ひ、冬期は更に土室の方に移り居住すと云ふ、

現今のペツロポウロスク

余等は今回キング氏の赴かれたるペツロポウロスクを訪ひしも、同所にては現今キング氏の時と大に其趣きを異にし、夏期の住居に使用する高小舍は單に食庫としてこれに供し、富豪者は木造家に居住し貧者は尙ほ土室に居住す、

カラガ村の高小舍と土室

されどカラガ村の土室及び高小舍は、キング氏の時と同一の目的にて使用せり、今其土室高小舍の一斑を左に記載せん、

土室は主として粗木にて構造せられ、屋根は四本の柱にて支へ、周圍には盛土をなし、室内の壁は泥土を以て塗り、前室は小、後室は大、この中央に石を組み集め作りなせる粗造の圍爐裡あり、室内の煙を外に出す爲めに外面に烟筒を設く、而して室内の地盤には清潔なる草、燈心草の類を撒き散らし、土人は日中はこれを絨氈に代用し、夜間は又寢具として用ゆ、カラガの土室は斯くの如くなれば、かのベーリング地方、コッパル島の土室などよりは稍や清潔の感あり、されど後者は室内極めて不潔なるに拘はらず、寢室の形狀、陶器、鐵製の煖室爐等は近世歐風の感化を受けたり、カラガ土人の或土室内には粗造の食卓、皿、匙等を供ふ、

カラガ村の土室及びカムチヤツカ、ダーリル

カラガ村現今の土室は古き航海者の記する所のものと大に異なれり、最初の航海者の到りし際には土室は入口を頂上に設け、これに梯子を架し、これよりして室内に上下する樣になり居りしが、今はこの形狀にあらで、ウナラスカ、コマンドル、千島諸島に行はるゝ土室の如く、洞部に入口を設け土人はこれより出入す、

高小舍は金字塔形の屋根を有し、床は地面より一〇呎若しくは一二呎位高し、茲に登るには一本の切目梯子を以てす、この梯子の類似はギルマルド氏も東察加カムチヤツカ河畔にても見られたり、外面(屋根)は獸皮を以て覆ふ、床の下には土人の冬期の食料、鮭の乾きたるものを掛け列らぬ、但し犬の近づくを恐れ其の達せざる距離に置く、ステルラル氏の圖によれば高小舍の形狀は圓形にて、

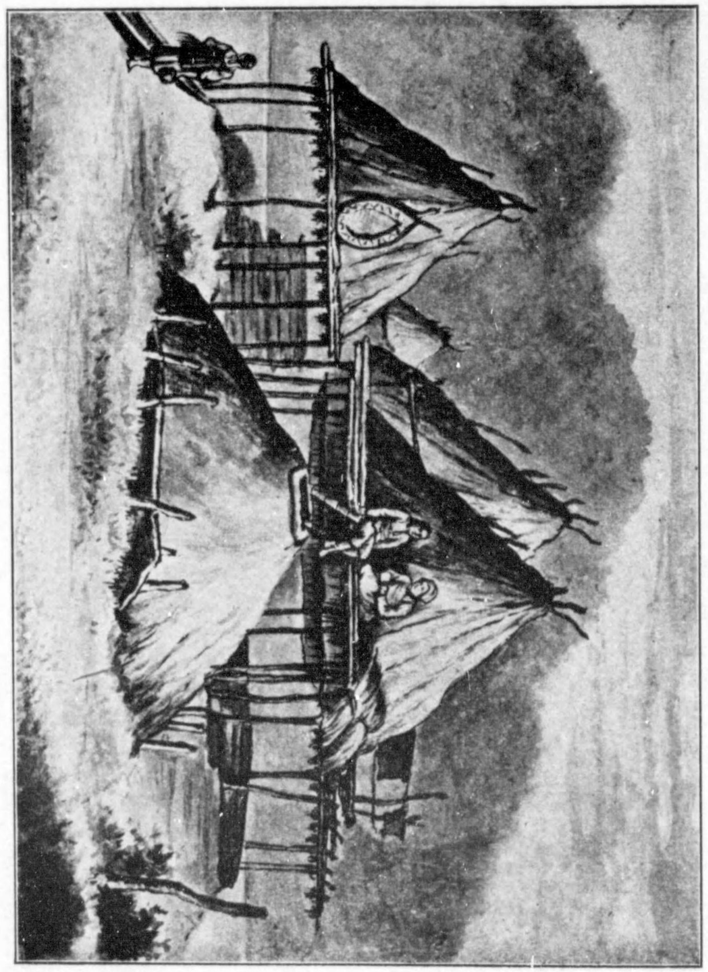
カラガ村の土室

これに架したる梯子は又簡單なるものにあらず、

カラギンスキ島

東察のカラガの陸地より僅かに一〇數哩、ウキンスク灣を相距てゝ一小島嶼あり、カラギンスキ島と稱す、この島の土人はカラガの土人と稍や異にして、容貌はチユクチ種族に相類似す、身長はカムチヤダールよりも勝れたり、住居はチユクチのテント小舍、ラングスドルフ氏の所謂、コリヤークの圓錐形の皮張小舍と類似せずして、カムチヤダールの家屋に類似す、衣服は寧ろ前者に似たり、

東察加なるペツロポウロスクにてカラギンスキ土人に就て云へる所を聞くに、彼等は元何づれの方なるか知らざれども、陸地に住居せしものゝ如し、冬期間、陸地とこの島との間の海峽は堅く氷を以て閉され、彼等はこの氷上を歩みて馴鹿を追ふて茲に來れり、彼等は

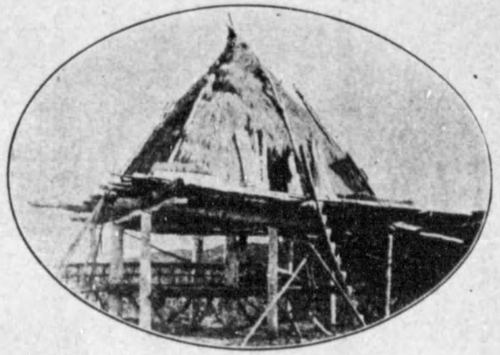


此の圖は著者のなり、れを參考として出したるものにあらず

倉高小及穴竪人土カッヤナムカ

土室と高小舍の構造比較

この島に來りしが一朝海峽の堅氷の解くるに會し、歸路を失ひ遂に茲に止まるに至りしと云ふ、以上の口碑と其他の事實とにより考ふれば、彼等の祖先はチュクチ若しくはコリヤークの一派にして其住地極寒帶より茲に水草を追ひ來りしものなるべし、而して彼等は茲に來りて後樹木の在るを利用し、東察加形の家屋を作るに至りしものならん、この假定は現今彼等の村落に婦女の乏しきを見るは稍や其想像を強くするが如し、



カラギンスキギ島の高小屋

この島の土人も尙ほ高小舍と土室とを作れり、高小舍は東察加陸地のものと同一にして、余等は其中に馴鹿、熊、狐等の皮を納めあるを見き、

土室は陸地のものとは大に形狀を異にし入口は天井にありて土人はこの天井より室内に往來す、この土室の形狀はクック氏第三回航海記に圖する東察加冬期の土室に似たり、唯だ異なるは婦人の爲めに入口を設けたること而已、

第四章　千島土人の移轉、及び人口、住居塲と漁塲

住居塲 Kotan ba.

千島土人は由來水草を追ひ島より島に移り行く民なれども、彼等は其中にも千島諸島にて一定の住居塲を有せり、土人はこれをKotan ba と云ふ、彼等のコタンバーは占守、ポロモシリ、ラサワの三島なり、今この三島に付て精しく記載せば左の如し、（こは主としてグリゴリに從ふ）

占守島

（一）占守島　村落は Betopó にあり、人口は男女合計凡そ四〇人許ありたり、而して戸數は一〇軒、これに高臺（Balagan 或は Pü）六個ありたり、高臺は他島に無く此占守島にのみ存在しき、こは蓋しもとカムチヤツカのバラガンを見習ひて作りたるものならん、

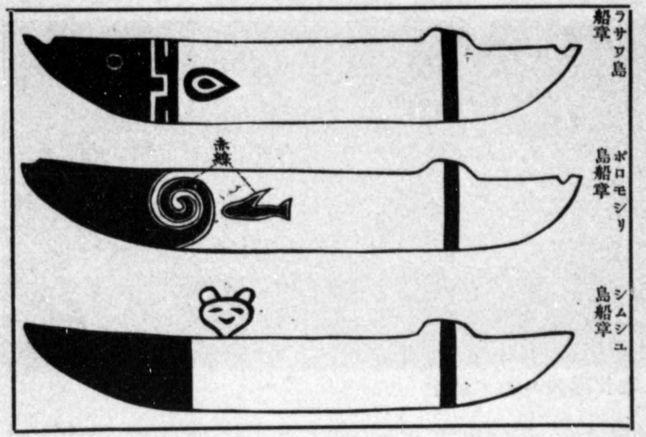
波羅牟利島

（二）ポロモジリ島　この島は昔にありては千島中最も人口戸數の多かりし所にて、土人の古語中にもポロモジリ島の人口の夥多しきを形容して斯く呼べる位なり、Chiri iku orukashin Aino tuman（島の居るよりも人の居る方が多い）されど近頃は占守島の方繁昌となりぬ、ポロモジリ島の村落は Betopo にて人口は凡そ五〇人許、大船一艘、小船四艘を有せり

ラサワ島

（三）ラサワ島　人口は四〇人位にして、戸數は八軒あり、一戸五人の割なり、

以上の三島にては昔圖の如き『船じるし』（Irongot）を用ゐたり、占守の船章には人の顔を彫刻せる木面（Speroram）を附着す、この木面は Fujiru と稱する化物に關係あるものなり、この事は他篇にて云ふべし、ポロモジリ島の船章は左右兩側に畫きたる鞆繪とシヤチ魚（Shachi）なり、鞆繪を Tomoe-noka と云ふ、アイヌ語なり注意すべし。シヤチも鞆繪も黑色を以て畫き、其緣を赤色にて彩色せり、



ラサワの船章は眼形（Chip shiki）にして黑色を以て畫けり、海上にて漁船を見るも是等の船章によりて何島のものなるやを知るを得、印を畫くに用ゐる黑色は草（Mūn）を燒き、それにトヾ若しくはトツカリ獸等の油（Kē）及び血（Kém）を混じて製し、赤には赤土 Shumam を用ゆ

漁塲（Onrahusushi）

前述の三島は住居塲なるが、土人は常に漁塲として或る地を撰定し此所に冬期を過ごすなり、其地は概ね左の如

し、

(一)オンチコタン島　漁戸 Pogiri shio に二軒あり、

(二)ハルムコタン島　茲は單に季節に後れ、他島に赴く能はざる者の已むを得ず來りて冬を過ごす所なり、漁戸九軒有り。別段地名無し、

(三)シヤシコタン島　漁戸は三ヶ所にあり、一は Moshiriba 東方にして四軒、二は Shiria 南方、三は Moshiut 北方にして五軒の漁戸あり、

(四)マツア　Posipo に五軒の漁戸あり、

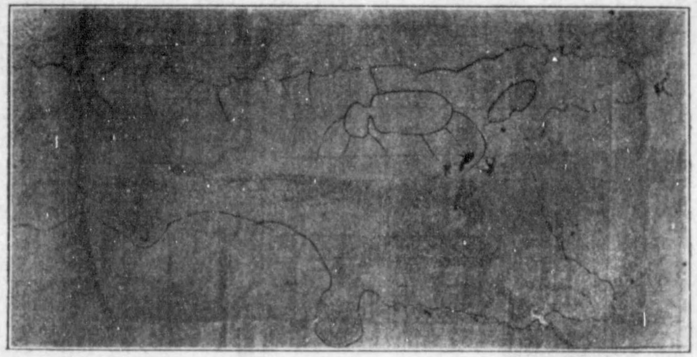
(五)ウシヨシル島　トヾ獸、カモ鳥などの獵場なり、此所よりラサワに歸るを常とす、

以上漁戸と稱せるは住家の稍や小なるものにして、其構造は共に竪穴(Chē 或は Toi-chē)なり、土人は住居場に於ても漁場に於ても冬期には狐狩りを爲すを常とす、際際土人は漁戸よりも一層簡單なる竪穴を作りつゝ島中所々を往來するなり、此故に久しき年月を經れば住居、漁戸、獵小舍共に土屋根崩れ落ちて竪穴の形のみを殘すべし、今日北千島に於て見る所の竪穴は實に此の三種の遺跡なり、尙ほ竪穴の事に就ては他篇に於て述ぶる所あるべし、

千島土人は通常棲息する住家を Toi chē 或は Chē と云ふ、トイとは土の意、チヱーとは家の意、トイチヱーとは土室と云ふ事なり、又或る島にて越年の爲に家を作る事有れば之を Riia-che と云ふ、越年の意なり、漁戸を Inun-che と云ふ、イヌンとは漁すると云ふ事、チヱーは家なり、獵小舍の事を Fuchakora と云ふ、

色丹移住以前の狀態及び人口

千島土人は前章に於て記せし如く、魚を捕へ、獸



千島アイヌの手になりし

名稱

オンチコタン島
ハルムコタン島
シヤシコタン島
マツア島
ウシヨシル島
漁戸獵舍

波羅牟志利島の圖

移住

墨き動物は熊にして、其下に記したるは其熊を射たる當日なり

彼等はかくの如く自から地圖を作り、又其上に當時起りたる出來事なも紀念として記す風習あり、この風習は蝦夷アイヌと異なる所なり、反つてエスキモー種族と相似たり

長谷部氏一行

井深氏一行

ミルン氏談話

を獵しつゝ各自のコタンペを離れ、島より島につたひ行くを以て、今年甲の島にあるかと思へば、翌年は乙の島に移り乙の島に來りしかと思へば、又た轉じて丙島、丁島に行くと云ふ有樣なれば、人口は住家、漁場の數を以て推測するを得ず、是等に就て總人員を知らんとするは極めて難事なりと云ふべし、

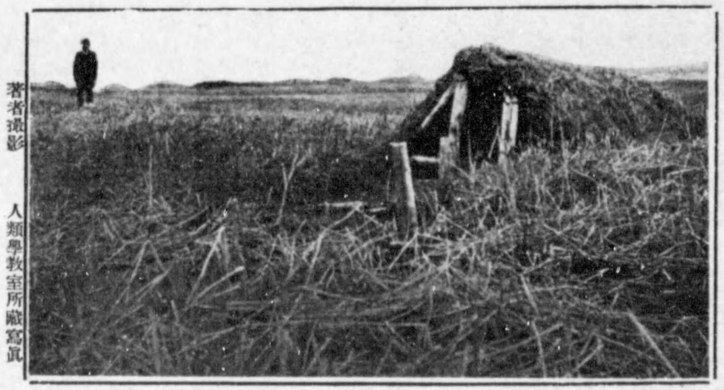
開拓使廳長谷部氏等の一行は明治九年に於て、千島の占守島を訪へり、其際の實際の人口は三十五名ありたり、（千島巡航概記）又同十一年に開拓使官吏井深氏等の同島を訪はれたる際には人員二十二名ありたり、（得撫外二郡復命書）而して千島に就て有名なる彼のミルン氏が同年に同島を訪はれたる時の人員は二十二名なりき、（亞細亞協會報告一九一頁）

ミルン氏が占守島に赴かれし際、二十二名の土人より聞かれし所によれば左の如し、

二年以前土人の或者は南方に移りたれども、其何島に至りしやを知らず、然るにスノウ氏によれば、其南方に移りし或者は一八七九年、一八八〇年の冬間にはマッア島にあり、後に又轉じてヲシア島及びウシヽル島に來れり、要するに彼等の移轉は常なきものゝ如し、

尙ほスノウ氏の自から記載せるものによれは左の如しとす、（Inhabitants of the Kurils. 一七頁）

一八七八年（明治十一年）に余は始めて北千島に赴きし際にはウルップ、ウシヨシル、ラシヤウ、シユムシユの各島に住民ありき、而して尙ほ他の各島にも曾て住民ありたるものゝ如し、シムシル、マタウ、カリモコタン（龍藏曰ハルムコタンを稱するもの）シヤシコタン、オチコタン、バラモシリの各島に凡そ十戸より三十戸にてなれる古村落あり。其他ケトイ、エカルマ、アライドの諸島にて古竪穴の殘れるを見たり、是等は恐くは永住場所にあらで、大移轉の際、獵隊に因て用ひられたるものなるべし、



著者撮影　人類學教室所藏寫眞

占守島ペツトポ舊土人家屋跡（竪穴）

スノウ氏の北千島に行かれたるは、恰もミルン氏の占守島を訪はれたると同年なれば、兩氏の記載を互に對讀せば當時土人の位置は稍や明に知るを得べし（スノウ氏の文中ウルップとあるはアリユート種族を意味す、）

長谷部氏等の一行は明治九年、千島土人を千島各島に訪ひしも占守島にて三十五名の土人に會せし而已。シヤシコタン、オンチコタンの兩島を訪ひしも住家ありて、土人は已にこの兩島にはあらざりき、

ウルップ、シムシルの二島に往するアリユート種族に付きては長谷部氏等の一行は明治九年に彼等と會談し、且つ採

同十一年

余の調査

集品さへもしぬ、而して同十一年に開拓使吏員井深氏等の右二島を訪ひし際にはアリユートは已に去つて只だ住家の存在するあるのみなりき、スノウ氏のウルップの住民とせしは是何人を意味するもの乎、千島土人とも思はれず、蝦夷人なる乎、考ふべし、

明治九年移住の狀態

余はミルン氏の明治九年に占守島を出發し、南方諸島へ移住せしと云ふ土人の一隊の調査に從事せり、(グリゴリ、セチフオンド、ウウレンチーに因て知るを得たり)而して左の事實を知るを得き、この事實は單に明治九年以來色丹移住前の移轉の方向、人口等を知ると云ふ點に留まらで、尚延て千島土人の古來習性の一たる『移轉』てふ問題の一班を示すものなり、

ミルン氏が土人の口より聞かれたる如く、彼等土人の一隊は確かに明治九年を以て占守を船出し、南方に移り行きぬ、而して其移住の目的は全く漁業にして、其人員は都合男女三十八名なり、是等三十八名の土人は各々大船二艘仕立て、甲船、乙船とし、甲船には男十一名、女十三名乘じ、乙船には男九名、女五人乘じたり、二船ともに夫々移住地にて必要なる器具其他のものを積込み、尚ほ二船共に一艘つゞの小船と獵犬五疋つゞを積込みぬ、今甲船、乙船に乘組たる者の名を記せば左の如し、

甲船

男	女
セコーフ	アクリナ

移住人員及人名

男	女
チーホン	アカヒヤ
グリゴリー	アブトチ
イヨン	ベラギア
ヨセフ	コンコルデ
ニコライ	オヒミイ
テモヘイ	ソヒヤ
アレキサンドル	アカルヘン
エイムカ	アラフラ
カルハ	アラトチ
セチンド	ナタリヤ
	エブロセニ
	ウリヤナ
計男十一名	女十三名

乙船

第四章　千島土人の移轉及び人口住居塲と漁塲

ヒヨウドル　ナスタス
カウリル　ドムナ
イワン　ワルワル
ニケイハル　イレナ
ピツサリオン　マルバ
プロコペ
オントン
イヨン
タニイル

計男九名　女五名

合計三十八名の船出せし後に、占守に殘りたる人員は男女合して三十二名なりき、而して尙是等三十二名の土人は大船一艘と小船一艘とを有し、犬は都合七十頭許を飼養せり、今是等三十二人の名を左に記すべし、

男　女

クフワアン　ステパニタ
アレキサンドル　マカリナ
イワン　ハリシテナ
ヒヨウドル　アクセニ
ワシリイ　マルハ
コウチン　エフラクセイ
ダニイル　タテヤナ
ラウレンチ　マリヤ
セメヲン　イライタ
エラシム　マリナ
ミハイル　エフケニ
アウエリヤン　ナスタス
セルゲイ　アンビス
アンテレイ　ワルワル
マキシム　ヌケリヤ
ミエテル　フエドシヤ

ポロモシリ島

明治六年移住の一隊

人員及び人名

計男十六名　女十六名

ミルン氏井深氏等の占守を訪問せし際の土人は、實にこの三十二名のものなりと云ふべし、而してミルン氏の土人より聞きたる南方行の土人は、實に以上三十八名のものなるや明かなりとす、

南方移住者の二艘の大船は勇ましくも占守を船出し、ポロモシリ島に來れり、而して今や同島を出船せんとする際、一艘の移住船の歸りたるものに會しぬ、この一艘の船は土人を都合十人乘せ居るものにして。實に明治六年に船出せしものにて、今やシヤシコタン島より此島に歸り來りたるものなり、今其十名の人名を記せば左の如し、

男

フ井リ　ブ
エレセイ
バービル
ラウレン
バラテミラ
クリシテホル

女

タリヤ
マリキサス
マリヤ
バラシコイ

出てんとする者歸り來れる者、相合して共に移住する事と成れり、四十八名の土人はポロモシリ島を後に見、船歌うたひつゝ勇ましく船出しぬ、

以上に據て見れば占守島に殘り居る者及び右の四十八名を合して當時の千島土人の總數八十名なるを知るべし、四十八名の土人は其後如何なる有樣にて移住し、且つ漁獵に從事せしやと云ふに、彼等は實に左の方向を取れるなり、今これを年表として示さん、

明治九年　ポロモシリ島を船出し、其年はシヤシコタン島に越年せり、

同十年　シヤシコタン島を出て其年はマツア島に越年せり、

同十一年　マツア島を出でラサワ島に越年せり、

同十二年　この歳土人一同は占守島に歸らんとせしが天候惡しくなり來りし爲め、己むなく船を留め、再びマツア島に越年するに至りぬ、

同十三年　この歳再びラサワ島に渡航し、此所にて

著者撮影　人類學教室所藏寫眞

占守島ペツトポ舊村落

越年せり、この歳ウシショシル島に米國の帆船（露西亞商人乘り込みたり）來たりしかばイワン等六人便乘し占守島に歸りぬ、

同十四年　ウシショシル島に航海せしが、グリゴリー、ラウレンチ、ニキハル、ビサリオン等二十八人は此歳この島に越年し、ヤーコーフ以下二十三人は前年居りたるラサワ島に歸り越年せり、

同十五年　スノウ氏の帆船來る、これに便乘し一同シャシコタン島へ行き、其年は此所に越年す、

同十六年　此年占守島に歸る、

彼等は明治九年より十六年まで八年を經過し占守島に歸り來りぬ。（明治六年に出船せしものは十一年を經過したり）而して彼等が斯くの如き數年間の大移轉中、其人員に就ての增減如何と云ふに四十八名中死去せしものは左の六名なりとす、

男

- ニコライ　七十餘歳にて老死
- カルハ　病死（胃病）
- カウリル　マツア島にて溺死
- バラテミラ　マツア島にて溺死
- ゲレーコレ　マツア島マツコウチにて病死三十四歳
- アレキサンドル　急病

尙ほ移轉中に生れたる者は左の如し、

男

- バルフイン　オンチコタン島にて
- フホルチキ　マカンルシ島にて
- アラデワン　マトワ島にて
- フオマ　ラサワ島にて
- キルク　同
- フヂリップ　マトワ島にて
- エスタシア　ラサワ島にて
- アレクセイ　同
- エフセイ　同
- テレフホン　ウシショシル島にて
- ヒョクテシ　シヤシコタン島にて
- アウクセンテ　ウシショシル島にて
- ヒトリヤ　ハルムコタン島にて

女	ヒトシヤ	オンヂコタン島にて
	ダリヤ	同
	マリヤ	ハルムコタン島にて
	エウトキヤ	ラサワ島にて
	ソロモニ	マツコワチ島にて
	マトロナ	ラサワ島にて
	ソシヤ	同
	アカルヘン	ウシヨシル島にて
	タリイ	ラサワ島にて
	ウリタ	エカルマ島にて
	ヒヨナ	マカンルシ島にて
	ステパニタ	ポロモジリ島にて
	オヒミイ	明治十六年シヤシコタン島にて
	フエクラ	明治十七年占守島にて

出生せし者は以上の如く總計二十七名なり、されど其中一名フエクラは占守歸島後、同一行中の土人中に生れたるものなれば、是を一名除きて、先づ二十六名なりと云ふべし、これに據て見れば移住は彼等の健康には聊かも關係なきを示すものゝ如し、殊に死者の六名中にても、一名は老年にて死し、二名は溺死せし者なれば、實際に病死せしものは三名なりと云ふべし、

尙ほ占守島に在留せる三十二名の土人は八年間、生死に付いて如何なる有樣を呈せしかと云ふに、死せし者は左の如し、

男	コウチン	占守島にて死す
	ダニイル	同
	レウヲンテ	カムチヤッカにて死す
	セメヲン	占守島にて死す
	エフアテ	同
女	マカリナ	同
	マリヤ	カムチヤッカにて死す
	エフケニ	同
	ヌタリア	同
	フエトシア	同

生れたる者は左の如し

生者

明治十六年の人口

男 マキシム カムチヤッカにて
オフホマン 同
女 ワレンテナ 占守島にて
ウイラ 同
テヨニシ 同
マウラ 同

これに據て是れば、占守島在留者三十二名の中、死者を出す事十名にして、新に生れたるは僅に六名なり、これを移轉組の土人に比較するに死者の割合反つて多きは奇と云ふべきなり、

最初の移轉の際、則ち明治九年には千島土人の總人口は八十名なりき。(占守島に留まりし者三十二名明治六年に船出せし者十名、同九年に船出せし者三十八名)而して明治十六年に占守島に歸り來りたる時の千島土人の總數は左の如し、

四十二名　移住者總數四十八名の中六名死せしを以て四十二名となりたり、この四十二名は、明治十三年ウシショシル島より米國帆船にて占守島に歸りたる六名も加ふ、

二十七名　移住中に出生せし者、一名明治十七年占守にてこの一行中に出生せし者をも加ふ、

九十七名

明治十七年

露米商社設立當時の人口

二十二名　占守島滯在者三十二名中、十名死せしを以て都合二十二名となりたり、

六名　占守及びカムチヤッカにて生れたる者

明治十七名には千島土人の總人口は九十七名なれば、明治九年の八十名に比し十七名の增加なり、此九十七名の土人は、明治十七年日本政府より命令を受け南千島の色丹島に悉皆移住せり、是に於て北千島は最早無人の土と變じ、曾て其地に住せし者は色丹島を以て第二の故郷となさゞる可からざる事となれり、

人類學教室所藏寫眞　(著者撮影)

第四章　千島土人の移轉及び人口住居場と漁場

千島土人の移轉及び人口附人名

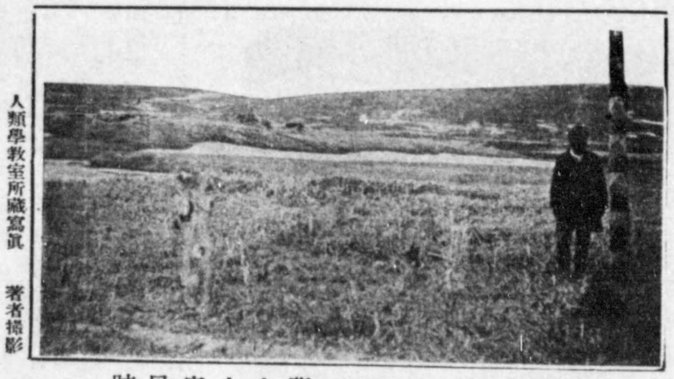
露米商社設立當時の人口

露政府は一八三〇年(天保元年)八月に、北千島諸島を露米商社(The Russian-American Company)に引き渡しぬ、其際會社にて調査せし人員は第一番島(占守島)に二十名、第二番島(ポ

ロモジリ島）に五十名、第七番島（シャシコタン島）に十五名、總計八十五名ありき、而して其後同商社の報告によれば第一番島（占守）第二番島（ポロモジリ）第十四番島（ウショシル）第十八番島（ウルップ）等には土人は一人も在らずして、此島々にラッコを獵するものは遠くアリウシャン諸島より來れるものゝみにて、唯第五番島（オンチコタン島）に九十七名の千島土人ありしのみ、

露米商社調査の九十七名は、恰も明治十七年頃の千島土人の總數九十七名と同一なり、然らば此間には人口增減著しからざりしを知る可し、

露魯米商社設立以前の千島土人々口は如何と云ふに、一七四七年（延享四年）にはカムチャツカの掌院、ホコウンチエウスキーなる者、修導司祭イヲサフを千島に向けて傳導に遣はせり、當時占守、ポロモジリに二百五十三名の住民ありしが其中五十六人を洗禮して歸れり、一七六六年（明和三年）ツエイ氏の調査によれば一番島（占守）二番島（ポロモジリ）十四



人類學教室所藏寫眞　著者撮影

占守島ペツトポ舊土人家屋跡

番島（ウショシル）の三島には男子（男女の誤なるべし）二百六十二人あり（内百二十一名は貢納す）一八〇〇年に至て基督教を奉ずる土人は男七十七名、女八十七名、合計百六十四人ありたり、

希臘教耶蘇古像

千北島より掘り出したるもの、質は銅なり

以上に據て見れば、一七〇〇年代には千島土人の人員は凡三百名近くありしものゝ如し、然るに一八〇〇年の始めに至ては百六十余人となり、魯米商社の頃となりては遂に百以下の人員となるに至りぬ

第四章　千島土人の移轉及び人口住居場と漁場

此事實に據て考ふれば、土人の數は段々に減少せし傾あり、

本章の材料はボロンスキー氏千島誌、及びキリロフ氏西比利亞黑龍江沿海州地理學統計字典等に據れり、

色丹移住後の人口

千島土人は明治十七年に色丹島の斜古丹灣に悉く移されたり、現今彼等土人の色丹島に在る總人口は實に左の如しとす、

總計六二名（男　二五人　女　三七人）

千島土人の總數は男女（小兒）を合して以上の如く僅かに六十二名に過ぎず、而して女子の數は男子より都合十二名多し、今余は參考として彼等土人の姓名及び年齢を記載すべし、（色丹正教會名簿に據る、姓名は露西亞風なり、姓名の下の數字は年齢なり）

現今の人口	人名		
	戸主	ストロツフ	五五
	長男	フイリツプ（フイリツプの妻イヤコフの長女）	一七
		エウドキヤ	一六
		マトロナ	一四
	次男	ストロツフ	五
		フイリモン（フイリツプの長男）	
	戸主	ストロツフ	五
		マヌイル	
	妻	ストロツフ	二八
		ラウレンテイ	
	長女	ツルワル	二七
	長男	エウゲニヤ	七
	次女	ストロツフ	五
	三女	シメオン	三
	戸主	メラニヤ	一
	實母	イリナ	
	妹	ストロツフ	一五
	長女	タテイアナ	四二
	戸主の妹	マウラ	一三
		ストロツフ	二
		ユリヤ	
	戸主	ストロツフ	一八
		バウリン	
	妹	ツフイヤ	一四
		セラフイマ	一〇

戸主	ストロソフ	トリフオン	一三
實母	ヘラキヤ		三七
妹	ステフアニタ		一一
弟	ザハリヤ		六
妹	アニシヤ		三
實父	ブリチン	イオアン	六一
同妻	マリヤ		二九
同妻（イオアンの長男）	ゲラシム		三五
同妻	ケルキラ		三三
次女（ゲラシム長女）	スエウロニヤ		八
戸主	ルキヤ		六
妻	イヲナ		二七
長女	ダリヤ	アクリナ	一九
戸主	ブリチン	グリゴリイ	二
	ブリチン		五〇

妻	ドムナ		三二
長男	エウフイミイ		二二
次女	アクリビナ	アルセニー	一四
エフヒミイ	ブリチン		
グリゴリ同居ドムナの連子	ストロソフ	イウリタ	一二
戸主（ステパニダの養子）	チエルニク	クセノホント	二〇
養母	ステフアニタ		六〇
戸主	ブリチン	アヲエルキイ	三〇
妻	エウドキヤ		三六
長男	フエオクテスト		一三
戸主	ブリチン	ユウテイヒイ	一三
實母	アレキサンドラ		三〇
弟	テート		七
妹	ペラキヤ		二
フエオトルの妻	チエルニク	タルワラ	三〇

戸主	チエルニク	ブロコピー	二二
妻	エフオドラ		一九
妹	タリヤ		一三
長女	チエルニク	アンナ	三
ブロコピークの弟ハリステナ養子	チエルニク	イロテイオン	一七
イロテイオン養母	ハリステイナ		五〇
戸主	ノボクラベン	ニキフオル	二八
妻	フエオドシヤ		一八
戸主ニキフオル弟	ワイツサリオン		二五
妻	アナシタスヤ		二九
ニキフオルの妹	ソロモニヤ		一四
長女	ノボクラベン	アガフイヤ	五
二女	ノボクラベン	エリサウエタ	二

千島土人を明治一七年七月に、この色丹島へ移住せしめし際には總人員左の如くありたり（明治十七年八月調査色丹島勤業課出張所調土人戸籍簿に據る）

人名

明治十七年人口

九七名〔男 四五名 女 五二名〕

『明治一七年八月舊土人戸籍』なる移住土人當時に作りたる最舊の戸籍簿より、參考として土人の人名を記せば左の如し。

番號	屬籍	姓名	歳
一	戸主	ヤーコフ ストロソツフ	四八
二	妻	アクリナ	三四
三	長男	フ井リップ ストロソツフ	九
四	三女	マトロナ	三
五	戸主	アレキサンドル チエールヌイ	四八
六	妻	ハリシテナ	四〇
七	長女	マルフア	二四
八	長男	セルゲイ チエルヌイ	一六
九	次男	オンドレイ チエルヌイ	一二

二五	養女	ダーリヤ	九
二六	戸主	フョドル　チエルヌイ	三九
二七	妻	アガフエイ	二七
二八	養子	プロコーペ　チエルヌイ	一三
二九	同	アラデワン　チエールヌイ	六
三〇	又從弟	ダーリイ	三
三一	大伯父妻	イレニカ	三一
三二	戸主	チモフェイ　プレチン	三六
三三	妻	ソウフイヤ	三三
三四	長男	ケイリェク　プレチン	六
三五	長女	エプローセン	一〇
三六	二女	フエドウシ	七
三七	三女	オフエシヤ	一
三八	戸主	クレゴレイ　プレチン	三九
三九	妻	コンゴリド	三五

一〇	三男	マキシム　チエルヌイ	一〇
一一	三女	ワレンテン	六
一二	婦	アブドーチ	二八
一三	連子	メノトレイ	八
一四	附籍	オクセニ	六七
一五	孫	パラシコロウ井	二
一六	戸主	イヨン　ストロソップ	四〇
一七	妻	ドムナ	二〇
一八	長男	エフスタッフ　ストローソップ	五
一九	長女	ウリイタ	一
二〇	同居	マリーナ　カラシリイコフ	四五
二一	戸主	ミハイル　プレチン	二三
二二	父	ワシ井リ　ストロソップ	?
二三	母	エライダ	四九
二四	妻	アレキサース	二〇

五五		弟ピッサリオン妻	ナスタッシ	一九
五六			サードフ	一
五七	戸主		イワン　ブレチン	五五
五八	後妻		ナター―レイ	二五
五九	三男		イヨン　ブレチン	一八
六〇	同妻		エウロキセイ	二〇
六一	養子		ハルウ井ン	八
六二	同籍		ソーフヒヤ	四
六三	附籍		フ井リップ	七六
六四	戸主		ケフリアン　ストローソッフ	四七
六五	妻		タチアーナ	二九
六六	三男		マキシム　ストローソッフ	五
六七	二女		マウラ	三
六八	戸主		イワン　チエルヌイ	三四
六九	妻		ステパニダ	四八

四〇	長男		エフェシヤ　ブレチン	一二
四一	次男		セヲホンド　ブレチン	一〇
四二	三男		フホルチケイ　ブレチン	七
四三	四男		ボウシイ　ブレチン	七
四四	長女		アカルフエン	三
四五	二女		フリトウチヤ	一
四六	後妻		イレニカ	三一
四七	戸主		ニケイファル　ノグラウ井ン	一八
四八		母	ナスタッシ	四二
四九		妻	ウリアナ	一五
五〇	次弟		ピッサリヲン　ノグラウ井ン	
五一	三男		アントン　ノクラウ井ン	一一
五二	二女		フエトリーヤ	
五三	三女		アブドウチ	八
五四	四女		ソロモニイ	

七〇	長男	アヲセンチ チヱルヌイ	二	
七一	長女	マーリイ	九	
七二	養女	アンナ		
七三	戸主	ラウレン ストロソフ	二〇	
七四	妻	ワルワル	一六	
七五	戸主	アウエリヤン ブレチン	一九	
七六	妻	アフトチ	一八	
七七	長男	ヒヨクテシ ブレチン	三	
七八	戸主	エレシイ ストローソツフ	三〇	
七九	妻	マアリー	二九	
八〇	長女	エフェミヤ	九	
八一	戸主	エラシム ブレチン	二八	
八二	妻	ヌクイリ	二三	
八三	長女	テヲニシ	二	
八四	戸主	ダニール ブレチン	二二	

225485

八五	妻	ワルワル	一九	
八六	長男	エフセイ ブレチン	一六	
八七	戸主	バヴビル ストローソッフ	二七	
八八	妻	バラゲイ	二八	
八九	長男	テレフオン ストローソッフ	一六	
九〇	長女	ヒヨーナ	一一	
九一	二女	ステパニータ	一八	
九二	妻連子	ヨーセッフ ロモオフ	九	
九三	戸主	アントペーシ ブレチン	四四	
九四	戸主	フ井リップ ストローソッフ	六六	
九五	長女	バラスコーウ井	二〇	
九六	孫女	アレキセイ		
七九	養子	クリストフホル ストローソッフ	七	〃

最初色丹島に來りし九十七名の土人は、其中六十三名已に死したり、而して色丹移住後、今日に至るまで出産せしは男子十六名、女子十六名、合計三十二名にして、且つ出産なし直ちに死せしものは十八

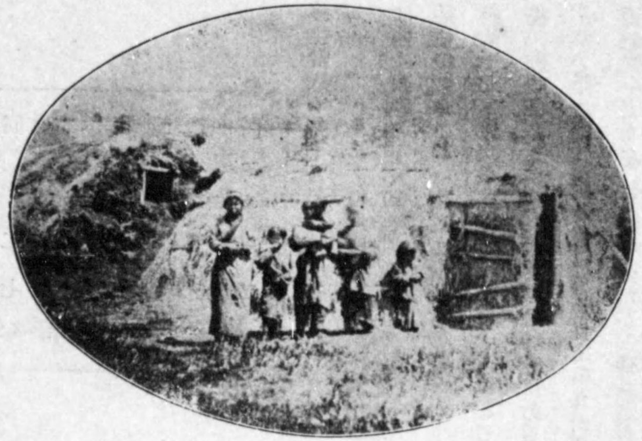
名あり、（男十名、女三名）されば現今色丹にある土人の總數六十二名は、最初の六十三名の死者を除きたる人員に、色丹にて生れたる三十二名を加へたるものなりとす、これに因て見れば現今の千島土人は移住當時の人員の三分二となりたるものと云ふ可し、今以上の出産、死亡を表示せば左の如し（生れて直ちに死亡せしものは除く）

	生		死	
	男	女	男	女
明治一七年				
同一八年	一	一	二	四
同一九年	一		四	七
同二〇年	二	一	一〇	七
同二一年	二	三	四	六
同二二年	一	一		
同二三年	一		三	一
同二四年		一		一
同二五年		二		
同二六年				
同二七年	二	一	三	一
同二八年	一			
同二九年	二	二	一	
同三〇年	三			
同三一年		二		
同三二年				

移住當時千島土人の「姓」は魯姓にしてストロソフ、ブレチン、カラシリニコフ、チェリニヒ、ノボクラベン、ロモオフの六種なりしが、其中カラシリニコフ及びロモオフ二姓の土人は已に全く絶へ、今は他の四姓の土人を存ずる而已、

稀住後數年の間は生者より死者の數多かりしが、今は比較的死者の數より生者の數多くなり來れり、明治十七年以來今日まで僅かに十五年なるに死者を出したると實に以上の如し、さて土人の斯く移住後、數年に多く死せしは其原因那邊にあるや、こは專門學者の大に注意する所となり居る一問題なりとす、余は色丹戸長役場にて戸長成田九内氏の許可に因て、種々移住當時の日記類を調査する便を得、古記錄中より左のものを得たり、聊か參考とするを得ん乎、

第四章　千島土人の移轉及び人口居住場と漁場



人類學教室所藏寫眞（著者撮影）

現今色丹居住竪穴

明治十七年七月二十七日、支古丹勸業詰所赤壁屬よ
り勸業課長へ差出したる書面に曰く

別紙戸籍一冊差出候條御備相成度候、アレクサン
ドル組は元來占守島に居住の者、ヤコフ組はラサ
ヲ島より近年占守へ移住之者に有之候、而して概
約、男の數は女に過ぎず、寡婦多く丁男甚少く候、
云々

同七月鈴木七郎氏、支古丹在御用係より同課長への
書面に曰く

去月十九日(即ち八月)以來土人の病者、日々六七
名あり、然れども重症は僅かに二三名に過ぎず、
小兒の如きは多分皮膚病なり、

同十二月二日、同氏の書面中に曰く

日本造り家屋分は不殘屋後へ浴室と稱し、土室を
作り之に居住致し居候、最も邑長二名則ちヤーコ

人類學教室所藏寫眞（著者撮影）

色丹島に於ける千島土人の墓墳

フ、アレキサンドル外二名は土屋あるも住み不
申、次に先般出來の穴居一戸は牛小舍に致し居候
甚だ不都合の事とは存じ候へ共之れを尋問するに
云々、

同十八年二月十二日、戸長役塲日記に曰く

此日土人等具情云、當島は如何にして斯く惡しき
地なる哉、占守より當島へ着するや病症に罹る者
陸續加之死去する者實に多し、今暫らく斯くの如
き形勢打續かばアイノの種盡きると年を越へず、
畢竟是等の根元は占守に於て極寒に至れば氷下に
種々の魚類を捕へ食す、故に死者のなきのみなら
ず患者も亦年中に幾度と屈指する位なり、然るに
當島には患者は皆々重く、輕症の者と云へば小兒
に至る迄なり、見よ一ヶ月間に不相成に死する者
三名、實に不幸の極とす云々、

同二月二十一日の條に曰く

正午より患者を問ふに、始め膝脚痛み、或は膨れ、兩筋引きつり、或は顏其他膨れ、齒ぐきより出血す、菅原醫員の曰く、此頃始めて此疾起る、之れを見るにスコイルボイクと唱ふ、此原因や多くは濕地空氣不融通、則ち穴居の如き場所に居住するもの發病す、然れども當地の如き場所のみに非らず云々、

人名

小金井博士の文

ボロンスキー氏の文

第五章　人　名

千島土人は久しく露西亞の人民となり居りしを以て、其人名も又露西亞名を附するに至りぬ、例令は男子にてはイヤーコフ　ストロゾウの如き、グリゴリー　ブレチンの如き、女子にてはダーリヤ、アカリフイナ、ステパニダの如き是なり、(色丹移住後生産せしものは尙ほ宗教上の關係にて露西亞名と日本名とを用ゆ)されど尙ほ土人名は存在せり、小金井博士はこのことに就て其論文中（醫科大學紀要 Beiträge fur Physischen Anthropology der Aino.第二卷二九九頁)に簡單なれども左の如く記載せられぬ

人名は現今露西亞名を用ゆれども、尙ほ土人の固有人名は全くアイノ名なり、即ちストロゾフ　ヤコーフのコンカマークルの如し。

ボロンスキー氏の千島誌によれば

初生の兒に名を命ずるに何の儀式もなく、何の緣由もなく、唯だ產婆の思ひ付きなどにてよき程に名くるなり、尤も時としては露人の曾て其所へ來りしものゝ名などを取りて名づくるとあり、基督宗に入りたる者は其本名の外、基督教名を付くる故、其名附親の姓を取りて『シバンベルグ』『ノヴイコフ「ストロゼフ」「クラシリニコフ」「ノヴヲグラブレンノイ」「ソーローヴイヨフ」など稱ふる者あり、

余は現今六二名の土人に就て、土名を取調べたるに、色丹移住前に生れたる者は大概尙ほ固有土名を有

せり、今この土人名を表とし示さば左の如し、但し參考として普通名をも附す、普通名は現今彼等の用ゆる如く「姓」を記せず、單に「名」の

千島アイヌ老女と少女

みを記す、

（普通名は土人ゲラシムをして露西亞語に記せしめ、余は更にこれを羅馬文字に綴り改めたり）

色丹移住の際、九十七名の土人の普通名として用ゆる「姓」はストロソフ、ブレチン、カラシリニコフ、チエリニヒ、ノボクラベン、ロモオフの六姓存在せしが、今はカラシリニコウ、ロモオフは死絶し、ストロソフ、ブレチン、チエリニヒ、ノボクラベンの四姓のみ存在す、

男子の部		土名
通稱		
Yakow.	Grigori.	Konkama-kuru.
Iwan.	Awerukí.	Iwashibi.
	Laurentí.	
	Ephiti.	
	Senihonto.	
	Ephusey.	
	Makushim.	
	Aradewon.	
	Trihon.	
	Pheoktist.	
	Paruphenty.	
	Gerashim.	
	Wisarion.	
	Nikiphare.	
	Ion.	
第五章　人名		

Namutusuma-kuru.	Suirante-kuru.
Rasutamaka.	Uniski-kuru.
Uribito-aino.	Kusurumaita.
Ekurukunchi.	Nimurashit-aino.
Cherama-kuru.	Kusankusu-kuru.
Kamuire-kuru.	

Prokapya.	Kapusui-aino.
Philip.	Sukochiure.

女子の部

通稱	土名
Palagi.	Kwarut'rutu-mat.
Moriya.	Tubasutai-mat.
Domnik.	Sutumui-mat.
Audatiya.	Shuranki-mat.
Waruwara.	Yabi-mat.
Soromoné.	Kaneyanki-mat.
Maura.	Kauranke-mat.
Stepanida.	Ekunrutu-mat.
Matrona.	Sunnaranki-mat.
Akariphina.	
Saphya.	Tatui-mat.

Uleita.	Nankurusu-mat.
Darya.	Saonke-mat.
Gelgeriya.	Metokorosu-mat.
Anstasya.	Kushintane-mat.
Phedosya.	Rapokushuma-mat.
Dauriya.	Rettuké-mat.
Phedoriya.	Supedaei mat.
Audotiya.	Tukura-mat.
Tamyata.	Menrarusu-mat.
Aleksandore.	Shikenrud-mat.
Warwara.	Iwanchekonoi-mat.
Stepaneta.	Shintkore-mat.
Haristena.	Seremakue-mat.
Seraphena.	Nesochiu-mat.

以上の表中にも見らるゝ如く、男子の「名」の終に Aino 若しくは Kuru の附せらるゝものをしてイ

アイノ及びクル

マツト

命名

ノは則ち「人」を意味す。Kuru は必ず語尾に附せらるゝ「人」なれども、例令ば東京人の人、阿波人の人の如きものにて、「アイノ」と云ふに比せば輕きものなり、而してこのアイノ若しくはクルは必ず男子の人名中の語尾に附加せらる

現今女子の方も、「名」の終には Mat を加附す、マットとは色丹「女」と云へる意味なり、女子の名には必ずこのマット島の附加せられ居るを見る可し、

千島居住是等の人名は代々受けつげるものにして、今はポロンスキー氏の記されたるが如き、其子生れたりとて、新千島なる名を附せず、男子は父の名を用ゆるのみ、例令ばアヌムッスマクルなれば其子も又同名を呼ぶ、其子の子イヌも又同名を用ゆ、他これに等し、されば表中に示す男女の名稱は各々其生れたる際命名せられたるにあらで、皆其兩親の名を次ぎ用ゆるのみ、

名稱すでに斯の如くなれば、今は自からの名の意味を

人類學教室所藏寫眞（著者撮影）

現今色丹島居住千島アイヌ

今や土名は消失せんとす

名稱

知るもの更になく、土人は通常この人名は古語にて其意味を知らずと云ひ、余は僅かに二つの意味を聞き取りたるのみ、そは Kapushui-aino「荒くれ男」と Kauranke-mat「帆を下す女」との二つなり、千島土人の固有なる「土人名」の有樣は斯くの如く、而して當今の青年少女は最早「土人名」を用ひさるなり、夢かくの如くなれば、以上の表中示す所の固有土人名は最も貴きものにして、今日の中年以上の男女死せば固有人名は單に昔語りと變じ、遂には斯るものゝ存在さへ忘却さるゝに至らん、されば余は殊にこの人名表を讀者諸君に紹介するものなり、

千島土人は露西西的人名を Imai と稱す、こは露語なり、而して土人名を Ré と呼ぶ、

第五章　人名

第六章　千島アイヌの言語

本編は今これを別て二と爲す、一は主として千島語の文法一斑を記し、一は其單語集を記す

文法一斑

本編は余が神保金澤二氏合著のアイヌ語學一斑（東洋學藝雜誌第百七十七號）に準じ編みたるものにして、余はこれを編むに當てグリゴリー、ラウレンチー、ニキハル、セヲホント等の千島土人の補助を得たり、茲にこれを公言す、

千島土人の文法書は余未だ之れを見たること無し、されば余は此文法に就て一も參考となしたる書無く殆ど創業の位置に立てり、されば又從て本編中誤れる所多かるべし、後の千島文法を編せんとする士は之が訂正に從事せられんことを望む、

尙ほ本編を讀まるゝ方々はドブロトウオルスキー氏アイノ露西亞字典、フヒツマイエル氏アイノ語集、バチエラル氏蝦和英三對辭書、チヤムバレイン氏文科大學紀要第一冊蝦夷語書、神保金澤二氏合著アイヌ語會話字典を參考せられたし、

本章常躰羅馬字を以て記せるは千島語にして、伊太利亞字躰を以て記せるは蝦夷語なり、讀者は兩語の比較に注意ありたし、

名詞の格

文法活用一斑

一、（名詞の格）

予の猫が古き鼠を捕へた
私の　猫が　古き　鼠を　捕へた
Kani　kosuku　hosuku　erum　iroma.

今日予の家に來れ
今日　私の　家に　來れ
Tanto　ku　chio'no　eke.

Ku koro, chape anakune onne erun koiki nisa ruwene.

Tanto ku unita ek.　或は　*Tanto en aita ek.*

名詞の比較

二、（名詞の比較）

牛より馬が速い
牛　より　馬が　速い
Sukodena　ekoshi　rosót　omâsutak.

Peko nekari umma anakne eitasa nitan ruwene.

此花の香が一番よい
この　花が　一番　香ひが　よい
Ten　chinchi　eikashi　fura　pirika.

Tan epui hara ijotta pirika.

代名詞の格

三、(代名詞の格)

水を少しく私に飲ませて呉れ
少し　水を　飲ませて　呉れ
Onō　pē　ēn　kore.

Wakka ponno patek kure wa en kore yan.

神は我々を造る
神は　我々を　造る
Kamui　un　kure.

Kamui un kara.

關係代名詞

四、(關係代名詞)

火を持て來いと云へ
火を　持て來いと　云へ
Abe　niki　ye.

Abe koro wa ek ani ye.

不定代名詞

五、(不定代名詞)

何でも骨折らずに出來るものはない
ないて　何でも苦ま　出來るものはない
Nebe　anesanbeteki　ankari.　(isam?)

Nep neyakka shomo aeshingino akarabe isam.

疑問代名詞

最初の Nebe 及び nep は又共に打消しなりとす

六、(疑問代名詞)

何故に汝は行かぬ乎
何故　汝は　行かぬか
Henkite　e　oman　ne.

Hemanda gusu echi shomo e arapa ya?

共に「何故」は初最にあり

現在動詞の形

七、(現在に於ける動詞の形)

雨が降つて居る
雨が　降て居る
Shirika　suwa.

Apto ash kor'an.

言葉は異なれども文法は同一なり

動詞の過去の形

八、(動詞の過去の形)

盜人が殺されたり
盜人が　殺されたり
Isuka-kuru　an rona.

Ikka guru araige nisa ruwe ne.

米飯を食て仕舞つたか
米飯を　食て仕舞つたか
Tō nanka ne ei pa.

Tokapibe e okere ruwe he an.

動詞の未來

九′（動詞の未來）

明日予行くべし
明日　私　行く　べし
Nishatta ku oman kusan wa.

Nishatta ku oman kusu ki.

動詞の Causative form

十′（動詞の Causative form.）

其物を私に見せよ
其物を　私に　見せよ
Tambe en un karute.

Tambe en nukare.

後置詞

十一′（後置詞）

木の下に人が居る
木の　下に　人が　居る
Ni bukit aino iki.

Ni choropokita ainu an.

山の上に石あり
山の　上に　石　あり
Shitokoi kata poina an.

kim kashiketa shuma an.

文章論

主格の位置

一′（主格の位置）

雪は白しものなり
雪は　白し
Ubasu retara.

Upas anakne retarabe ne.

千島語は蝦夷語に於ける如く主格は文章の最上位にあり

目的主格の位

二′（物主格の位置）

汝の酒
汝　の　酒
Ane (e) sake. (tonoto.)

E koro tonoto.

形容詞の位

三′（形容詞の位置）

(a) 貧乏人
品物 人
Nebe yeyecho kuru.
Wen guru.

(b) 犬の歯は長し
犬の 歯は 長し
Shita imaku tanne.
Seta nimoki tanne ne.

a の千島語の yeyecho の前の nebe は「無」との打消にして則ち物品などを持たぬと云へる義にて「貧乏」と云くることを現はしたものなり、この貧乏は名詞の上にあり、又この形容詞なる長は語の終にあり、

副詞の位置

四、(副詞の位置)

早く行け
早く 行け
Konou omane.
Tunash no arapa.

文法蝦夷語と同一なり

接續詞の位置

五、(接續詞の位置)

も—遲しから歸ろ—
も— 遲い から 歸ろ—
Oku akareto shiranso kokobo wa.
Tane moire kusu, ku koshipi.
Kuloshipi tane moire kusu ne na.

疑問副詞の位置

六、(疑問副詞の位置)

如何程欲しか
如何 程 欲しいか
Han bokube e kou rusui.
Makanak pakno e kon rusui?

文法互に等し

打消命令辭の位置

七、(打消し命令辭の位置)

笑ふ勿れ
笑ふ
Nek mina.
Ieki mina.

即ち打消は語の前にあり

次に單文一つを掲ぐ、これにて文章構造の如何を見る可し

第六章　千島アヌイの言語

私は河へ水を汲みに行きましたが、其處に犬がありて、私を吠へられたれば、私は大に困難しました

私 は 水 汲みに 河へ 行き ました 其處て 犬が 居つて 私 に 吠へられて 困難 した
Kani su pē tasu pét koman na tata shitai kusu kani nape ene meki kotosuno wa.

代名詞

我 kani 汝Āni 或は e 彼 tan guru 我等 Ini 汝等 Echoka 彼等 Tairikichi guru

あの	Tān	この	Tēn
彼處	Tamte	此處	Temte
これ	Tambe	あれ	Tambi
是の衣服	Tān uru	あの衣服	Tēn uru.
私の物 Kani (Koro) be			
男	Okkai	女	Turesh (mat.)
雄	Pinne	雌	Manne
雄犬	Pinne shéta.	雌犬	Manne shéta

鶴が 飛ぶ
Pasukuru kāre.

今 私は 川へ 行く
Tani kani pet koman.

あの 人は 赤き 衣服を 著て居る
Tan guru hure uru niri.

雨 が 降て 寒い
Yurā shi merai here sana wa.

今日は
Toro ma.

山の 上へ 行く
Shitokoi kau koman.

私は 山 上へ 行き ます
Kani shitokoi kau koman wa.

君は 茶を のむか
E chani ku na.

私へ もー 茶をのみました
Kani oku chani ya.

茶が 無い
Chā isam.

花が ない 美しく
Chinchi neben pirika.

これを何と 云ふか
Tam habu nika.

これは 茶碗 ですか
Tam sariki ika.

これは 茶碗で あります
Tam sariki wa.

美しく ございます
Pirika wa.

ません 行き
Nebe koman.

行き ましよう
Koman kusanu wa.

數語

千島土人の用ゆる數語は次の如し

1, Shiné.

2, Dōbechi.

3, Rēbichi.

4, Inep.

5, Ash'kimep.

6, Iwampe.

7, Aruwampe,

8, Dobisampe.

9, Shinibesampe.

10, Wambe.

この 1—10 は數の基本にして、これを組合せ種々の數を作るなり、今試みに 11 より 19 までの數を作らんとせば "Wanbe kasuma" の前に 1—9 を置けばよろし、即ち

11, Shiné wambe kasuma.

12, Dōbechi „ „

13, Rēbichi „ „

14, Inep. „ „

15, Ash'kinep. „ „

16, Iwampe. „ „

17, Aruwampe. „ „

18, Dobisampe. „ „

19, Shinibesampe. „ „

又 20, 30, 40 等の數は次の如し

20, Howát.

30, Wambe tót.

40, To wát.

50, Wambe ereót.

60, Inát.

70, Wambe a'sh keneót.

80, Ash′ kine′at.

90, Wanbe ēwanhót.

尙 21, 35, 48, 93 等の數を作らんとせば 10 以下の數を常に前に置き "Kasuma "を附すべし、例令ば次の如し、

21,	Shiné	hówat.	kasuma.
22,	Dobechi.	„	„
23,	Rēbichi.	„	„
24,	Inep.	„	„
25,	Ash′kinep.	„	„
26,	Iwampe.	„	„
27,	Aruwampe.	„	„
28,	Dobisampe.	„	„
29,	Shimibesampe.	„	„

以下 99 まで同一なればこれの例にて他は推知すべし、100 の數は次の如し、

Aruwam hówat.

千島土人の數語は 100 まで位にして其以上は最早要無し、されば余は土人に 135 の如き數を問ひしも、答へる能はざりき！（余の從者グリコフー老人に就て）尙ほ 1,000 及び10,000 の如きは最早彼等の用ゆる能はざる數にして、又其語も存せず、

以上の數語は明かに蝦夷語と等しきことを示せり（讀者はペチニラル氏蝦和英三對辭書の數詞の所參考せられたし、）

尙參考として千島土人の用ゆる尺度を記すべし、千島土人の尺度は次の如し

a. Tem.

b. Attem.

c. Ate′ kishiri.

d. Paruteke.

Tem は右の手くびより左の手くびまで延ばしたる長さなり、

At′tem は胸の中央より一方の手くびまで延ばしたる長さなり、

Até kishiri は肩より一方の手くびまでの長さ、

Paruteki 手の長さ、（手くびより中指までの長さ）

單語集

本編の單語は神保理學博士と金澤文學博士との「アイヌ語學一斑」(東洋學藝雜誌第百七十八號所載)中なる單語集に準じて集めたるものにして、親しくグリゴリー、ラウレンチの二人より聞き取りたるものなり、余は比較の爲め、神保金澤兩氏の集められたるアイヌ語をも並べ記せり、余は別に明治二十四年三月に神保永田兩氏の編されたる北海道地名普通語集(語數二百七十九あり)に因て千島語を集めたりしが、其はこの單語集の後に記載することゝせり

本編を讀む人は尚ほ小金井博士アイヌ論文第二冊三〇〇頁、ランドル氏"Alone with the Hairly Ainu"三〇五-三一二頁をも參照せられ度し。

蝦夷語千島語單語比較

千島語

(一) 日月、山川、四時の類

日、月、山川四時の類

天	Kan'do.	Nisaru kando.
地	Moshi'ri.	Kotan hapuka.
土	To'i.	Toi.
雲	Nishu'kuru.	Niehu.
雨	Ap'to.	Shiriwin.
雪	Upas.	Ubashi'.
火	A'be.	Ape.
水	Wakka.	Peh. (Wakka は古語なりと云ふ)
氷	Kon'ru.	Konru.
霧	U'rara.	Urarube.
霧	Mum'be.	Kinape.
日	Tokap'-chup.	Shiripekuru chup.
月	Kun'ne-chup.	Shirokoro chup.
星	Nochi'n.	Ketta.
山	Kim.	Shito'ko'i. (このkは恰も獨乙のchの音に似たり)
川	Pet	Pe't.
海	Atui	Atuika.
崎	Tanne no't,	Shi'retu.
霜	Retat'taskoro.	Tasukuru.

雷	Kamu'i hu'mi.	Kamui humu.
島	Moshiri.	Moshiri.
道	Ru.	Toiru.
川上	Penata.	Pet'cha.
川下	Panata.	Pet'kucharu.
浪	Ko'i	Koi.
澤	Na'i.	Pesui.
沼	To.	To.
地震	Shi'ri-chimo'ye.	Shiri shumii.
雹	Ka'uka'u.	Ubashiyuru.
みぞれ	Peshosh.	Rekamyuri.
岩	Wa'tara.	Pira. Watara. (細く高き山)
川端	Pet'-sam.	Pet chai imaku.
石	Shuma'.	Poina.

濱邊	Shit'teksam.	Peicharu.
川向ふ	Pet'kushta.	Pet'chā.
川原	Pirata.	Peturo poina.
瀨	Ut'ka.	Watasasuna.
野	Nup.	Mun ushi. (Nup は古語なりと云ふ)
風	Re'ra.	Re'ra.
洪水	Okm'umbe.	Pēsam. Okinbe. (古語)
峯	Shi'ri kitai.	Shitoko'i pat'ki.
虹	Rayo'chi.	Rayunchi.
水源	Pet'etoko.	Pet' sukari Yambe.
瀧	So.	Chararushi pet.
林	Ni'tai.	Ninshi.
晴れる	Ap' to oka'kean.	Tondo ibiruka.

灣	Moi.	Chipoyani.
砂岸	Ota′ uni.	Otaka.
岐路	Ru uko′hoki.	Euko biru.
泥	Te′ine toi.	Teini toi.
冷き	Nam.	Yam.
寒き	Me.	Imaraikiri.
暑き	Se sek′.	Iseseka.
暖き	Pop′ke.	Shiripoki shishaki.
昔	Hush′ko.	Hoshkoiwanu.
今	Ta′ne.	Tani.
今年	Tam′ba.	Tamba.
明年	Oya′pa.	Yekusakamhuru.
去年	Sak′ne.	Isautapānu.
去々年	Ho′shiki sak′ne.	Kochaoki tambe.
春	Pa′ikara.	Paikaranu.

夏	Sak.	Sakunosuki.
秋	Chuk.	Chukam.
冬	Ma′ta.	Mata.
正月	Cha′rup.	Ashinueki chup.（始めて來りし月）
二月	Toe′tanne.	Totanenita.（日の長き月）
三月	Hap-rap.	Hakurapu′.（土人意味を知らず）
四月	Moki′uta	Baigenchiri chup.（バイゲン鳥の來る月）
五月	Shikinta.	Kopiunoka chup（ゴメ鳥の卵を產む月）
六月	Shir′ji.	Harunoka chup.（鴨の一種ハル鳥の卵を產む月）
七月	Ma′uchi.	Shikiibikaru chup.（サケ魚の河に登る月）
八月	Niho′rak.	Shiinum chup.（マス魚の河に登る月）
九月	Ya′rui.	Chirarukaru chup.（チラルカ鳥の多く居る月）
十月	Ure′pok.	Morusashumuka.
十一月	Shu′nan.	Tō ashi. (?)
十二月	Kuye′kai.	Kuekai.（狐を掛ける月）

今日	Tan'to.	Tanto.
昨日	Nu'man.	Numan.
一昨日	Hoshike numan.	Isaoto numan.
明日	Nishatta.	Nisatta.
明後日	Oya'shim.	Nisatta shimuka.
晝	To no'shike.	Tō nan.
夜	An'chikara.	Shirekorak.
昨夜	U'kuran.	Isoto kuram.
夜中	An'noshike.	Ubananochike.
夕	Shi'ri onu'man.	Onumanan.
日暮	Shi'iri kun'ne.	Shiriko kunne.
埃	Pa'na.	Iramikoraka.

（二） 貴賤、職業、父子、兄弟の類

日本人	Shi'sam.	Yam shi'sam.
旦那	Nish'pa.	Utarukurukuru.

商人	Ikok'guru.	Yoku shisham.
通辯	Tunchi.	（千島に無し）
百姓	Toi'ta guru.	（千島に無し）
醫者	Isha nishipa.	Ikaraikuru.
死者	Ra'iguru.	Raikuru.
貧者	Wen'guru.	Nebe yēgochakuru.
幼子	Te'inep.	Tem'nep.
子供	Pon'cho.	Bonbo.
吾	Ku, Kuani.	Kani.
汝	E, Ea'ni.	Āni, E.
父	Mi'chi.	Michi.
母	Ha'bo.	Nonno.
兄	Yu'bi.	Habo.
弟	Aki'.	Akibo.
伯父	Ke'ushut.	Keukeu.

伯母	Una'rabe.	Met'ke.
姉	Sa'po.	Habo.
妹	Turesh'.	Ake'bo.
孫	Mip'poho.	?
甥	Ka'raku.	?
兄弟	I'riwak.	Turanai gep'ne kuru.
男	Okk'ai.	Okkai.
女	Shiwen'tep. (menoko)	Turesh, Mat. (Menoko は日本語若くは蝦夷アイヌ語なりと云ふ)
夫	Hoku'.	Kokkai.
婦	Machi.	Kani kokkai.
親族	Apa.	Turunaigipureguru.
先祖	E'kashi.	Eka'shi.
翁	Cha'-cha.	Achabo.
姥	Una'rabe.	Unabe.

村長	Otte'na.	Utarukurukuru tono. (ottena は日本語なりと云ふ且つトノも殿か)
若者	Heka'chi.	Okkai.
病人	Shiye'ye guru.	Ushoka't.
孕女	Hon'koro meno'ko.	
盗人	Ik'ka guru.	Usema'p.
惡人	Wen'guru.	Wen kuru.
僕婢	Au'itek guru.	Suwate mat. 女 Aniki guru. 男

(三) 支體死活の類

首	Sa'pa.	Crup.
尻	Aso'ro.	Shibui.
身	Neto'bake.	Kamba.
手	Te'ke.	Teké
足	Ke'ma.	Kema.

腹	Ho'ni.	Tui.
髭	Re'ki.	Reki.
眉	Ra'ru.	Raru.
眼	Shink.	Shiki.
臂	Shit'toki.	Komuta.
まつ毛	Shik'-rap.	Skiki-rap.
唇	Pa'toye.	Chātoi.
頤	Not'-kiri	Not-kyu.
頬	Nota'kam.	Nota'kam,
鼻	Etu'.	Etu.
目しり	Shik-kesh.	Shik-ap.
目かしら	Shik-pake.	Nubik-shiki.
耳	Kisa'ra.	Satapa.
脊	Setu'ru.	Humgin.
咽	Se'uri.	Sekutu.

腰	Ik'kewe.	Tumom.
股	Om.	Chinkotoru.
爪	Am.	Am.
膝	Kok'ka.	Kokka.(大腿 Omunya, 脛Shihiriboni, 足底Porura.)
掌	Tek'kotoro.	Tekuwaru.
指	A'shikepet.	Ashikibit.
右手	Shi'mon tek.	Shiteki.
左手	Ha'rikitek.	Harikiteki.
大指	On'ne ashkepet.	Pora shikibit.
人指	Itan'gikem ashkepet.	Moraruke.
中指	No'shike ashkepet.	Shikonkep.
紅さし指		Hashikonkep.
小指	Po ash'kepet.	Ononashi kep.
乳	Tot'to.	Nonāka.
臍	Han'gu.	Kanko.

顔	Manu.	Erup.
胸	Pen'ram.	Tui.
肩	Tap'-shutu.	Kup'keu.
口	Cha'ro, pa'ro.	Imak.
舌	Parum'be.	Auk^{h}（注意すべき發音）
歯	Nima'ki.	Imak.
妊娠	Hon'koro.	Huse an.
涙	Nu'pe.	Nubi'.
唾	Top'se.	Bharabekoro.
血	Kem.	Kem.
痒き	Maya'iye.	Iyēkiki.
咳嗽	Om'ke.	Fyashina.
腫物	Io'ship.	Shiri.
欠び	Ma'ukush.	Eyakomaushike.
鼻血	Etu'kem,	Etu'kemunuh.

疾	Shiyeye.	
不快	Kiroro wen.	Iram karubaruneine usarum.
肥る	Mim'ush.	Pian.

（四）起居進退の類

寢る	Mokoro.	Mokōro.
起る	Hopu'ni.	Hobuni.
横はる	Hot'ke.	Shap kandara noki'.
立つ	Rosh'ki.	Ashē.
坐る	Mo'no a.	Abuna.
草臥	Shingi.	Nokataki.
休む	Shini.	Eishika.
生活する	Shik'nu.	
殺す	Ron'nu.	Esuron nuk.
強き	Yup'natara.	Pikamkuru.
弱き	I'yoropota.	Shiuente kuru.

葬る	Yairamnu'ina.	
登る	Mokan.	Makan.
尋る	Chi'pa-chi'pa.	Eshitani.
生まる	Hetu'ku.	Uaran.
盗む	Ik'ka.	Anishipe, Anun gorabe.
拭ふ	Pi'ruba.	Ichakari antuitui.
廣ろげる	Pirash'pa.	Ankirasu.
再び戻りて	Hotoko.	Ekusanuwa.
待つ	Te're.	Esuteri.
宿る	Reush'.	Esukoriushi.
行け	Paye'an, Oman.	Eshota.
來い	Ek.	Tentene ekaku.
歩む	Ap'kash.	Ap'koshi.
先に	Ho'sehik.	Isawat.

後ろに	Osh.	Oushi.
遠き	Tu'ima.	Tuima tani.
近き	Han'ge	Tebo tani.
游ぐ	Ma.	Ma.
貼る	Kotuk'ka.	Kambe anshiro kosutekka.
走る	Chash.	Chashi.
變事	Ro'rumbe.	Ōikunant.
赤く染る	Hu'rere.	Hurut'ki.
黒く染る	Kun'nere.	Eko roku.
戰ふ	Ura'ige.	Uraiki.
逆ふ	Ki'ra.	Kika.
行く	Oman, paye'.	Koman. (一人行く) Payean. (一所に行く)
燒く(魚)	Ma.	Che pan ma.
掃ふ	Itu'ituey.	Sotuitui.
饑饉	Kem'ram.	Anebisom, Kem'ram. (古語)

割れる	Pe'reke.	Perike, deinip.
馳せ行く	Hoyu'pu oman.	Chase.
番する	Pun'kine.	Ikāshikamo.
働く	Niwash'nu.	Monroiki.
大切	Ya'itobare.	Aneyambe.
烈き	Yup'ke.	Yup'kibibi.
弱き	Sa'ure.	Shiunte.
初め	Ashin'no.	Isawat.
濁る	Nup'kı.	Pē imok.
越す	Kush.	
虚言	Shun'ge.	Shunge.
驚く	Ramu'tui.	Rim'shi.
怒る	Iru'shika.	Irushika.
祈る	Inon'no	Kamui auka ek burai ruki.

退屈	Mish'mu an.	Tumi.
算へる	Pish'ki.	Ibishik's.
量る	Paka'ri.	Pishiki.
渡海する	Atu'i koro.	Atui koro.
同道する	Ahineraye.	Esutorakan koman.

（五）談論、思考、五感の類。

聲	Hawe'.	Hau.
音	Hu'mi.	Hum.
物語	Isho'itak'.	Itak.
曰く	Itak'.	Itakano.
どもる	Itak ununi.	Itak kim.
告げる	Nush'te.	Eshikibishi.
問ふ	Ko'ipisi.	Ukibishibat.
耳語	Dā'riri.	Pī itak.
悲しき	I'yomap.	

毒	Shu'ruku.	Shuruku.
甘き	Ru'ra.	Shiu.
苦き	Shi'u.	Nubuke.
香	Hu'ra.	Hura.
味	Kera.	Kera.
喰フ	I'be.	Ibe.
飲	Iku'.	Kuye.
見る	Nuka'ra·	Inkari.
賢き	Yawash'nu.	Raman.
心	Ke'utum.	Iramkarubaru.
欲い	Kon'rusui.	Konrishi.
惡む	Chish'ishi.	Nekonoburut.
知らぬ	Iramush'kare.	Iramushkari.
知る	Ramu'an.	Kanikior'ate.
喜ぶ	Yairen'ga.	Katanoburu.

驚く	Oyamok'te.	Obena.

（六）家屋器財の類。

家	Chise'i.	Ché.
舟	Chip.	Chip.
鍋	Shu.	Shu.
着物	Amip'.	Uru.
柱	Ikush'be.	Ukushube.
爐	A'be-oi.	Aboi.
戸口	A'pa-sam.	Mua shinto.
帆	Ka'ya.	Kaya.
戸	A'pa.	Abushita. (Aba a'shi 戸を閉てくれ)
弓	Ku.	Ku.
箭	A'i	Ai.
小刀	Maki'ri.	Eperaniki.(Makiriとも云へどこれは蝦夷アイヌ語なりと云ふ)

箒	Mun'nuyep.	Shutnituip'
筥	Kina'.	Kina.
盃	Tu'ki.	Tūki.
箸	Pashu'i.	Euturumbe. (箸)
		Pashui. (匙)
椀	Itan'gi.	Nisara, itangi, chasu-ka.(日本語と云ふ)
網	Tush.	Haitush.
刀	Emush.	Emush. (蝦夷アイヌ語なりと云ふ)
臼	Ni'shu.	(千島に無し)
杵	Iyu'tani.	(千島に無し)
下駄	Pirak'ka.	(千島に無し)
鎌	Yop'pe.	Moshitam.
煙管	Serem'bo.	Kiseri.
枕	Chie'ninu'ibe.	Chinuibe.
鎧	Hayok'pe.	Kani haiyoku'pe (Yam-guru はこれを着て我等と戰ひたることあり)
箱	Shu'op.	Shutop.
草履	Ke're.	(千島に無し)
木綿	Sen'gaki.	Ekorok tepa.
糸	Ka.	Ōka. (露西亞語なり)
帶	Kut.	Kut.
皮	Hak.	Chinrushi. (鳥皮)
		Rushi.
砥石	Ru'i.	Rui.
金	Kon'gane.	Kon'gane.
銀	Shiron'gane.	Gim.
		Shirogane, serebrok (露西亞語)
銅	Hu're ka'ne.	Hu're kane.
鉛	Ya'i kane.	Shipenet. (露西亞語)

(七) 鳥獸魚虫の類

熊	Kamu'i.	Kim'kamui.
	Chiramandep.	Chiramandep.
	Hokn'yuk.	
狐	Chiron'nup.	Chauchau.
犬	Se'ta.	Seta.
狸	Mo'yuk.	（知らず）
鹿	Yuk.	Yuk, Oren.（露西亞語にして馴鹿のことなり）
牡	Ap'ka.	（知らず）
牝	Momam'be.	（知らず）
兎	I'sepo.	（知らず）
狼	Wo'se kamui.	（知らず）
獺虎	Rak'ko.	Rakko.
海月	Hum'be eto'ro.	
夫魚	Ibe shara.	
にまん	He'roki.	Heroki.

鰻	Sak'ibe.	Sakibe.
鮭	Shi'be.	Shichep.
鱈	E'rekush.	Erekush.
鯨	Hum'be.	Rika.
鮑	A'ibe.	（知らず）
鰯	Pon'chep.	（知らず）
蠣		Chibu.
うに	Ni'no.	
鷲	Kaba'chiri.	Shurukuru.
鳥の羽	Rap.	Kongon, Teku rap.
鷹	Chi'ri ko'iki.	Keik' sup.
雀	Aman'chikap'.	Ush ap.
鶴	Saro'run.	Koma'ki.
蛇	Tok'koni.	（知らず）
蜂	So'yai.	（知らず）

草木の部

蚊	Etutan'ne	
蛙	Te'rekei'be.	（知らず）
しらみ	Ki.	Tok'tok.
だに	Pa'raki,	（名無し）
螢	Nin nin'keppo.	（知らず）

（八）草木の部

ゑぞ松	Shun'ku.	
柳	Shu'shu.	Shu'shu.
萩	Shin'kep.	（知らず）
楢	Pe'roni.	（知らず）
栗	Yam.	（知らず）
根	Ni shin'rit.	Ni shin rit.
朽ちる	Ni tom'tom.	Mumin.
花	Epui.	Niyam.
實	Ibe-he.	Yashikomui.

善惡大小長短の類

凋む	Shum.	Shum.
散る	Hachawe.	Turushi.
枝	ni'tek.	Ni'tek'i.
幹	Ni neto'ba.	Niinotobo.
葉	Ham.	Yam.
虎枝	I'kokut.	
姥百合	Haru.	Turep.
粟	Mun'jiro.	（知らず）
麥	Meu'guro.	（知らず）
耕る	To'i ta.	Ikaram.
種	Pi.	
米	Amam	Amama.
酒	Tono'to.	Sake tonoto.
餅	Shito'ki.	

（九）大小、長短、善惡の類、

大	Po'ro.	Poro.
小	Pon.	Onono.
善	Pi'rika.	Pirika.
惡	Wen.	Wen.
赤	Hu're.	Hu're.
白	Reta'ra.	Retara.
黑	Kun'ne.	Yekoroka.
濡す	Te'ine.	Anrikananka.
干す	Sat'ke.	An sat'ke.
清潔	Ash'kanne.	Nei ichakarambe.
不潔	Ichak'kere.	Ichakkare.
傾く	Horak'.	Shabudare.
淺	Ohak'.	Hagiri.
深	O'oho.	Shiro.
太き	Ru'we.	Ruwepe.

細き	A'ne.	∨netanepe.
上	Rikitane.	Tep'pake.
中	No'shikike.	Shinoshike.
下	Tek'kesh.	Rātane.
短かき	Tak'ne.	Taki'ne.
長き	Tan'ne	Tan'ne.
厚き	Iron'ne.	Iseseka.
薄き	Kapa'ra.	Kap'kap'ke.
狹き	Hut'ne.	Hup'ne.
廣き	Sep.	Sēbe.
堅き	Nish'te.	Nishite.
前	Kot'chake.	Kot'chāke.
後	Osh'make.	Osumakke.

(十) 助辭の類、

不可	Ite'ki	Uenowa

不	Shomo'.	Nebaw.
無	Isam.	Isam.
よく	O'rowa.	Pirikane.
早く	Tuna'sh.	Kongo.
同じさ	Uko'rachi.	Uman.
物	Pe.	Be.
皆	Obit'ta.	Anaikibi.
再び	Okoto.	Kan'na.

千島地名普通單語集

神保小虎、永田方正兩氏は明治二十四年三月八日附を以て『北海道地名普通單語集』と題したる問題書を世に公にし、これを北海道各地方の人士に配布し、其の單語を蒐集せられんと試みられたり、余は兩氏の單語集に因て色丹島にて左の單語を蒐集せり、今これを茲に掲げ讀者の參考に供す

この單語は主として千島アイヌのものにして、ラウレンより聞き取りたり

矢	Ai.
十勝石	Anji 或は Yes.
釣針	Ap 或 Kon.
立つ	Ash.
群集する	At 或 Wekari.
海	Atuika.
枝	Hashiteki.
休む	Eshiku.
火	Abe.
有る	An.
彼方	Tantan 或 Anruru.
半分	Ubakusami.
新しさ	Ashiri 或 Ashiripe.
オヒヤウ	Hebiu.
裸なる	Rut apuchi.

川	Pét.
刈る	Muntara.
圍	Chasa.
小さき魚	Onono chep.
枯れる	Sate' ki.
鳥	Chiri.
丸木船	Pat chip.
家の如き	Chemananbe.
流の急	Pet chiutūnashi.
大陽又は大陰	Shiribekeri chiup (明なる日) Shirikuku chiup. (暗き日)
口	Charu.
我々が	Chiokai chente.
食土	Chētoi
乾魚	Satéki chep.
丸木船がある	Pat an.

小屋	Che.
秋	Chukam.
尖りたる	Etūani-no.
獵	Orrubusamna.
岬	Nót.
前	Shētok.
流れ出る	Hā.
川等源	Pét kura tok.
昆布	Sasunu.
川の別れる所	Pét ewosuha.
葉	Niyam.
魚卵	Homa.
呼ぶ	Hotuyeba.
狹	Hup'ne.
香	Hura.

坂	Hurukotare.
淵	Umaki.
逆さなる	Sepukamdoru.
聲音	Hau.
トママツ	Hup.
赤	Hure.
古い	Hushiko.
彼等	Tariki chikure.
アイヌの幣束	Inau.
岩山	Pira kashi.
絲	Oka.
作る、取る	Ikaran.
折る、曲る	Kaichika.
ハンの木	Ke'n ni.
草	Mun.

浪	Koi.
處、村	Kotan.
前	
假小舍(漁獵場)	Ushi che.
黑い	Ekoroku.
向	Achāto.
咽口	Serora.
回流	Hatara.
硫黄	Iwau.
柴	Shinrushi.
神	Kamui:
丸小舍	Upushi karuno che.
木原	Ni tai.
山	Shitokoi.
弓	Chia ni ku.

物を乾す竿	Kuma.
越す、通す	Eika.
岩	Pira.
後	Horuka.
冬	Matam.
泉、沼	Mem.
海岸の小灣	Onono moi no kura.
女、妻	Machi.
風	Reara.
小さい	Onono.
穩なる	Shiripiraka.
遲ひ	Nekoonka.
蕁麻	Iriiripi. (古は Mose.)
中島	Pét moshiri.
頭をなでる	Pārarakān.

草を刈る	Munto.
澤	Peshiui.
高原	Parakinuhu.
斷崖	Asupira.
濕地	Saruka.
木實	Niashi kamui.
鳥卵	Nók.
濁りたる	Moku.
色	Nupuru.
高い山	Chacha.
河尻	Pét kuchiuri.
落ちる	Hāchinrān.
入る	Aune.
臀	Shibui.
灣	Moinokuru.

砂	Ota.
冷かなる	Yam.
木	Ni.
森	Nitai.
中	Shinoshike.
よもぎ	Noya.
茅野	Mosu.
山	Shitokoi.
曲り	Pet honike.
……が在る	An.
大	Poro.

Onne. は蝦夷アイヌ語にして、千島アイヌ語には今なし、昔はこの語を用ひ居りたりと云ふ

澤山	Tumanpiki.

川上	Pet kuretok.
川下	Pet kucharo.
口	Charo.
下	Ratanne.
水、川	Pe.
明るき	Shiripepere.
破れる	Peréke.
下る	Rannu.
崖	Aka. 或は Pira.
川	Pet.
澤	Peshiui.
渦流	Shikaru pari.
蔭	Buki.
善	Pirika.
濱	Pēchara.

乾きたる河原　Echikari.

小　Onono.

Pon. は蝦夷アイヌ語にして、我父は同アイヌ語としてこの語を使用せり

岩洞　Pōra.

穴　Okom'nki.

この m. は注意すべき發音

破裂する　Periki.

有要食物の一種　Upei.

激湍　Tarutaruke.

草の葉　Munebui.

下　Ra.

死ぬ　Rai.

殺す　Rona.

低き　Ram.

下　Ran.

下る　Rap.

鳥の羽　Tekubu.

オンコの木　Raruma ni.

水深き　ō.

三つ　Rebichi.

海　Atuika.

海中　Rurusam.

三日　Retō.

向ふ　Tante.

白き　Retara.

白鳥　Retara chiri.

曲る　Noike.

高い　Ri.

越年　Riyāan.

道　Toirū.